

筑後東部地区遺跡群 V

筑後市大字久恵・新溝所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

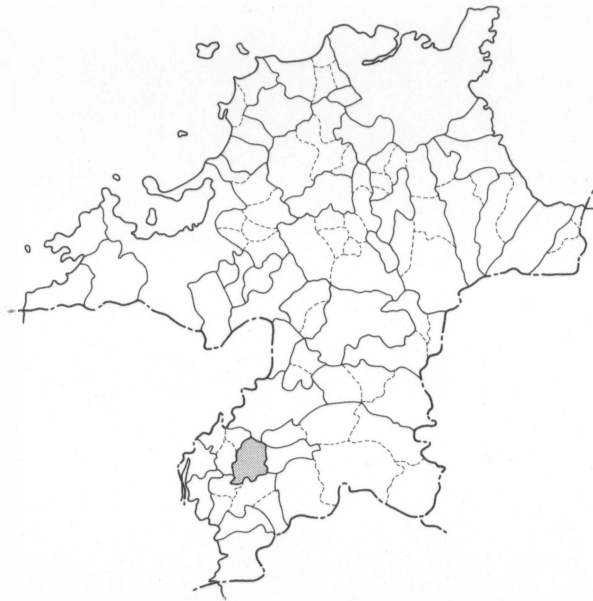
第35集

2001

筑後市教育委員会

ちくごとうぶちく
筑後東部地区遺跡群 V

くえきたくさば 久恵北草場遺跡	第1次調査
しんみぞふるわたせ 新溝古渡瀬遺跡	第1次調査
くえねえじろう 久恵内次郎遺跡	第1次調査
くえねえじろう 久恵内次郎遺跡	第2次調査
くえかわのうえ 久恵川ノ上遺跡	第1次調査
くえきしのした 久恵岸ノ下遺跡	第1次調査
くえきしのした 久恵岸ノ下遺跡	第2次調査



2001

筑後市教育委員会

序

本書に掲載した各遺跡の発掘調査は、平成7年度県営ほ場整備事業筑後東部地区の事前調査として実施したものです。現地での発掘調査は平成6年度から平成7年度にかけて実施しました。

ほ場整備事業に伴う発掘調査は比較的広範囲を調査することが多いため、その地域の歴史がおぼろげながらも明らかになっていきます。しかし、それと引き替えに大切な文化遺産が消滅してゆくことも意味しています。これからは、遺跡保存に対する早急な対応が求められている時代でもあります。

本書では、縄文時代から近世に到るさまざまな遺構と遺物の報告を行いました。各方面で些少なりとも活用いただければ、喜ばしいことです。

最後になりましたが、現地での調査から報告書刊行に到るまで、ご配慮ご指導いただいたみなさまに厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例言

1. 本書は福岡県筑後川水系農地開発事務所が平成7年度に実施した、県営ほ場整備事業筑後東部地区の事前調査として筑後市教育委員会が行った埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 発掘調査・遺物整理・報告書の刊行は筑後市教育委員会がおこなった。調査体制・調査関係者は第I章に記載している。なお、本書で報告した各調査で得られた資料は、すべて筑後市教育委員会で収蔵保管している。
3. 本書に使用した遺構実測図は大島真一郎・奥村太郎・岡崎陽子・野田洋子・塚本映子・田中剛・小林勇作・永見秀徳が作成したが、遺構配置図のうち久恵川ノ上遺跡（第1次調査）と久恵内次郎遺跡（第2次調査）をアジア航測株式会社に、久恵岸ノ下遺跡（第1次調査・第2次調査）を朝日航洋株式会社に、それぞれ委託して航空測量により作成した。遺物実測図は徳永みどり・平塚アケミ・永見が作成した。また、製図はⅢ-1・Ⅲ-2・Ⅲ-6を仲文恵・平塚が、それ以外を永見がおこなったが、航空測量によった部分は、それぞれの委託先が製図したものを使用した。
4. 本書に使用した遺構写真は、大島・野田・塚本・田中・小林・永見が撮影し、遺物写真は小林・永見が撮影した。なお、気球写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。また写真の現像焼き付けは、くたみフォトサービスに依頼した。
5. 本書に使用した方位はG. N. を水準はT. P. を基準としている。なお、遺構の主軸等の方位は実測図上で分度器を用いて計測した。北から45°東にあたる場合、N-45°-Eと表記した。
6. 本書で使用した遺構の略号はつぎのとおりである。
SB-掘立柱建物 SD-溝 SK-土壙 SP-ピット
7. 出土遺物の実測図は土器を1/3、石器を2/3で掲載している。なお、須恵器のみ断面黒塗りとした。
8. 本書の執筆はⅢ-1・Ⅲ-2・Ⅲ-3を小林、その他を永見が担当し、編集は永見が行なった。

目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	5
1. 久恵北草場遺跡（第1次調査）	5
2. 新溝古渡瀬遺跡（第1次調査）	9
3. 久恵内次郎遺跡（第1次調査）	10
4. 久恵内次郎遺跡（第2次調査）	11
5. 久恵川ノ上遺跡（第1次調査）	17
6. 久恵岸ノ下遺跡（第1次調査・第2次調査）	23
IV. まとめ	37

I. 調査経過と組織

本書は平成6年度と平成7年度に発掘調査を行った、筑後東部地区遺跡群の調査成果を集録している。これらの調査は、平成7年度県営ほ場整備事業筑後東部地区の工事によって消滅する部分について記録保存の措置をとったものである。今回調査対象地となった部分は排水路や面調整による切土の予定地で、工事によって遺跡が消滅することになった。

平成5年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所（工事第1課）から、筑後市教育委員会に対して、平成6年度の施工予定地内の文化財の取り扱いについて照会がなされた。これを受けて筑後市教育委員会は当該地区の試掘調査を行い、埋蔵文化財の包蔵が予想されることを回答した。その後の協議で、できるかぎり盛土による現状保存を行ったうえで、一部について記録保存のための発掘調査を実施することになった。

また、平成6年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所（工事第1課）から、筑後市教育委員会に対して、平成7年度の施工予定地内の文化財の取り扱いについて照会がなされた。これを受けて筑後市教育委員会は当該地区の試掘調査を行い、相当の部分に埋蔵文化財の包蔵が予想されることを回答した。その後の協議で、できるかぎり盛土による現状保存を行ったが、どうしても遺跡の破壊を免れることのできない箇所について本調査を実施して、記録保存の措置をとることとなった。ただ、本調査を必要とする面積が広大であったため、調査は平成6年度から継続して行うこととした。調査は第7工区の排水路予定地を優先して、南側から順次おこなっていった。その際、工事の前年度から円滑な発掘調査を実施するために、筑後東部土地改良区には地元説明等で大変なお骨折りをいただいたことを記しておく。

なお、整理作業は平成12年度に、筑後市教育委員会文化財整理室で行った。調査組織は以下に記したが、調査担当者は「III. 調査成果」の各調査報告の中の「1. はじめに」に記載してあるので、そちらを参照されたい。

平成6年度

1) 調査組織

総括	筑後市教育委員会	教育長	森田 基之
		教育部長	津留 忠義
庶務		社会教育課長	下川 雅晴
		社会教育係長	松永盛四郎
		社会教育係	永見 秀徳（文化財専門職）
			小林 勇作（ 々 ）
			塚本 映子（文化財学芸員）
2) 発掘調査作業員			地元有志

平成7年度

1) 調査組織

総括	筑後市教育委員会	教育長	森田 基之
		教育部長	津留 忠義
庶務		社会教育課長	下川 雅晴（～平成7年9月30日）
		々	山口 逸郎（平成7年10月1日～）
		社会教育係長	本村 正晴
		社会教育係	永見 秀徳（文化財専門職）
			小林 勇作（ 々 ）
			田中 剛（文化財担当）

塚本 映子 (文化財学芸員)
 大島真一郎 ()
 地元有志

2) 発掘調査作業員

平成12年度

1) 調査組織

総括	筑後市教育委員会	教育長	牟田口和良
		教育部長	下川 雅晴
庶務		社会教育課長	庄村 國義
		文化係長	成清 平和
		文化係	永見 秀徳 (文化財専門職)
			小林 勇作 ()
			上村 英士 ()
			立石 真二 (文化財学芸員)
			柴田 剛 ()

2) 整理作業参加者

平塚アケミ (整理補助員)
 仲文恵、野間口靖子、徳永みどり、野口晴香、湯川琴美、横井理絵 (以上、整理作業員)

なお、発掘調査前の協議から、現地調査、報告書作成に到るまで、次の方々から貴重な御助言、御指導をいただいた。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)また、工事の調整等では福岡県筑後川水系事務所をはじめとする工事関係者にも多大な御協力をいただいた。

佐田茂 (佐賀大学)、水野正好 (奈良大学)、工藤敬一 (九州産業大学)、佐々木隆彦・伊崎俊秋・小田和利 (以上、福岡県教育庁)、大塚恵治 (八女市教育委員会)、山田元樹・坂井義哉 (以上、大牟田市教育委員会)、大島真一郎 (黒木町教育委員会)、塚本映子 (三潁町教育委員会)、富永直樹 (久留米市教育委員会)、石井扶美子 (夜須町教育委員会)、山村信榮 (太宰府市教育委員会)、永松敦 (椎葉民俗芸能博物館)、岡田雅人 (草津市教育委員会)、狭川真一 (元興寺文化財研究所)



Fig.1 各調査地点位置図 (1/5,000)

II.位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜め池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中央部に形成されている。

また、この地は古くから交通の要衝として栄え、古代官道のひとつ西海道も市内を縦断していたと考えられている。この地に人間の活動痕跡たる遺跡が確認されるのは、概ね縄文時代早期である。旧石器も市内で出土しているが、点数も少なく、集落等の確認例はない。縄文時代早期は所謂「縄文文化」の諸要素が揃う時期として注目されるが、その時期から遺跡が確認できるようになるということは、初期縄文文化の担い手によって、あらたに集落等が営まれたことを意味していて興味深い。ヴィルム氷期後の海進とともに縄文人が活動を開始したと理解できよう。この時期の遺跡は久恵中野遺跡・久恵岸ノ下遺跡・鶴田岸添遺跡・志前田遺跡・志西野々遺跡等が知られている。しかし、このあと市内では、前期の土器が数片出土した以外、縄文時代の遺跡は晩期まで途絶えてしまう。

次に遺跡があらわれるのは、縄文時代晩期の刻目突帯文土器の段階である。弥生時代早期ともとらえられるこの時期は、つづく弥生時代前期とともに水稲耕作が始まった時期としても注目されている。この時期の遺跡は、上北島塚ノ本遺跡・常用日田行遺跡・梅島遺跡等が知られている。

この地方の弥生時代集落は、はじめ比較的標高の低い市の南部を中心に出現するが、中期後半以降北部の低丘陵上にも展開するようになる。また、この段階から集落の数も急激に増加する。この時期の遺跡は、蔵数森ノ木遺跡・鶴田岸添遺跡などが知られている。

古墳時代から古代までは、今回報告する遺跡に当該期のものが含まれていないので、ここでは割愛する。当市教育委員会発行の他の調査報告書を参照されたい。

中世は荘園が発達する。筑後市とその周辺地域では公領系の広川荘・上妻荘、安楽寺系の水田荘・下妻荘等が著名である。荘園の周辺部には武士等の居宅とみられる館跡があり、荘園の支配体制との関連で興味深い。この時期の遺跡は、長崎坊田遺跡・鶴田楯原遺跡等が知られている。またこの時期には石造文化も栄え、坂東寺石造五重塔・前津宝篋印塔等の秀作が残されている。

近世、とくに江戸時代には薩摩街道筋に市内3ヶ所の宿駅が栄える。なかでも羽犬塚宿は久留米藩の三宿のひとつとして重要視され、ここにおかれた御茶屋には歴代藩主もたびたび休泊している。この時期の遺跡は、羽犬塚寺脇遺跡・羽犬塚町囲等が知られている。

また、本書で報告する筑後東部地区遺跡群は市の南東部に位置する。南に矢部川を望み、多数の小河川が北東から南西へ流れている。その小河川に挟まれた部分に微耕地や河岸段丘が発達し、その上に多くの遺跡が展開する。現在の集落の多くも同様の地形上にあり、基本的な土地利用は弥生時代から現代までかわらない。昭和期の後半に九州自動車道が開通し、八女インターチェンジがつくられてからは、この地域の交通アクセスは飛躍的に向上した。そのため、旧来の集落景観は急速に変化しつつある。



Fig.2 周辺の主要遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|---------------|
| 1. 石人山古墳 | 2. 欠塚古墳 | 3. 蔵数森ノ木遺跡 | 4. 羽犬塚寺脇遺跡 |
| 5. 長崎坊田遺跡 | 6. 上北島塚ノ本遺跡 | 7. 梅島遺跡 | 8. 常用日田行遺跡 |
| 9. 志前田遺跡 | 10. 鶴田岸添遺跡 | 11. 鶴田橋原遺跡 | 12. 筑後東部地区遺跡群 |

III. 調査成果

1. 久恵北草場遺跡（第1次調査）

(1) はじめに (Fig.3)

当遺跡は、筑後市大字久恵字北草場284に所在する。一帯は水田地帯で標高17m位の低位段丘上にある。調査は、平成7年度に施工された農地整備事業支線用排水路設置範囲において、遺構を確認した約450㎡を実施した。調査期間は平成7年7月18日から同年9月28日までで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当し、田中剛の協力を得た。調査の結果、調査区からは溝、土壌、ピット等を検出し、以下はその成果について報告する。

(2) 検出遺構

竪穴

SK35 (Fig.6)

調査区のほぼ中央から検出した竪穴で、SD30に切られる。深さは約0.10mを測り、堆積土は濃黒茶色土であった。出土遺物はなく、確認した遺構の平面プランは、一見すると竪穴式住居のコーナー部分とも捉えられるようで、ここでは竪穴とした。

溝

SD05 (Fig.6)

調査区の西端から確認した南北溝で、5.0m分を検出した。上幅0.37~0.56m、下幅0.25~0.45m、深さ約0.05mを測り、淡灰色粘質土を基調とする堆積土であった。出土遺物はない。

SD10 (Fig.6)

調査区の南東端で検出した東西溝で、溝の東端はSK65を切る。溝の断面形はU字状を呈し、上幅0.32~0.54m、下幅0.22~0.30m、深さ0.14m前後を測る。堆積土は2層に分かれ、上層が淡灰色粘質土、下層が暗灰色粘土であった。出土遺物はない。

SD15 (Fig.6)

調査区の南東側で確認した東西溝で、4.8m分を検出した。断面形はU字状を呈し、上幅0.23~0.41m、下幅0.15~0.17m、深さ約0.14mを測る。淡灰褐色粘質土の単一土層で、遺物は出土しなかった。

SD20 (Fig.6)

調査区のほぼ中央部を蛇行する溝で、上幅0.26~0.40m、下幅0.17~0.23m、深さ0.03~0.22mを測る。溝の断面形はほぼU字状を呈し、灰色土を基調とした堆積土であった。遺物は縄文土器(片)、土師器(片)が出土している。

SD30 (Fig.6)

SK35を切るように確認した溝で、10.8m分を検出した。上幅0.60~0.95m、下幅0.40~0.45m、深さ約0.28mを測る。濃灰色土を基調とする堆積土で、出土遺物は皆無であった。

SD40 (Fig.6)

SD30の北側で確認した溝で、4.0m分を検出した。淡黒茶色土を基調とする堆積土で、上幅約0.40m、下幅約0.35m、深さ約0.10mを測る。遺物は出土しなかった。



Fig.3 久恵北草場遺跡調査地点位置図 (1/2,000)

SD 4 5 (Fig.6)

調査区の北側で検出した溝で、上幅約0.40m、下幅約0.25m、深さ約0.07mを測る。出土遺物はない。

SD 5 0 (Fig.6)

調査区の北側で確認した溝で、SD 5 5 を切るように検出した。上幅約0.25m、下幅0.20m、深さ約0.05を測り、淡黒茶色土の堆積土であった。出土遺物はない。

SD 5 5 (Fig.6)

SD 5 0 に切られた溝で、長さ4.6m分を検出した。上幅0.30~0.37m、下幅0.20~0.25m、深さ約0.05mを測り、暗黒茶色土を基調とする堆積土であった。出土遺物はない。

SD 6 0 (Fig.6)

調査区北端で確認した南北溝で、4.9m分を検出した。上幅0.38~0.45m、下幅0.25~0.37m、深さ約0.05mを測り、堆積土は淡黒茶色土であった。出土遺物はない。

SD 7 0 (Fig.6)

SD 1 0 の北側で検出した蛇行した溝で、4.8m分を検出した。出土遺物はない。

土壌

SK 2 5 (Fig.4)

調査区のほぼ中央部で検出した隅丸長形状の土壌で、長軸1.63m、短軸1.25m、深さ0.89mを測る。遺物は出土していない。

(3) 出土遺物

溝

SD 2 0 (Fig.5)

縄文土器

不明 (1・2) 1は口縁部の細片で、著しく磨耗しているので文様は不明である。胎土に角閃石などの砂粒を多く含む。2は体部の細片で、外面には沈線が認められるが、著しく磨耗しているので文様は不明である。胎土は角閃石などの砂粒を多く含む。

(4) 小結

工事の都合上、トレンチ状の調査区設定となったが、竖穴1基、溝12条、土壌1基、ピット群といった遺構が確認されたことは大きな成果といえよう。しかし、調査区内はかなりの削平を受けていたためか、出土遺物が極めて少ない状況であり、残念ながら遺構の時期を特定することはできていない。

次に、確認された主要な遺構についてまとめる。

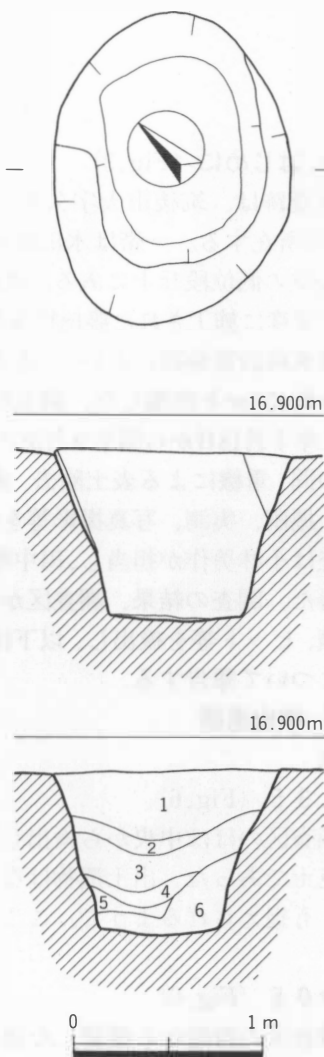
・竖穴

SK 3 5 は、深さ0.10m前後と非常に浅いものであったが、掘り形の状態は良好であった。確認した遺構の平面プランは、一見すると竖穴式住居のコーナー部分とも捉えられ、住居の可能性もある。

・溝

調査区からは12条の溝が確認されている。溝の性格としては、用排水のための溝や土地等を区画するための溝などが考えられるが、極めて残存状態が悪かったため何れとも捉えられない状況であった。

SD 2 0 からは縄文土器を出土しており、当該期の遺跡が周辺に展開する可能性が考えられる。



1. 暗黒茶色粘質土 (赤色粒子を含む)
2. 黒色粘質土 (赤色粒子を含む)
3. 暗茶色粘質土 (灰色粒子を含む)
4. 淡黄茶色粘質土
5. 暗黄茶色粘質土
6. 暗茶黄色粘質土 (黄茶色ブロックを含む)

Fig.4 SK 2 5 実測図 (1/40)

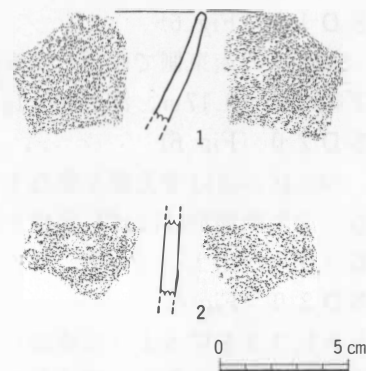


Fig.5 SD 2 0 出土土器
実測図 (1/3)

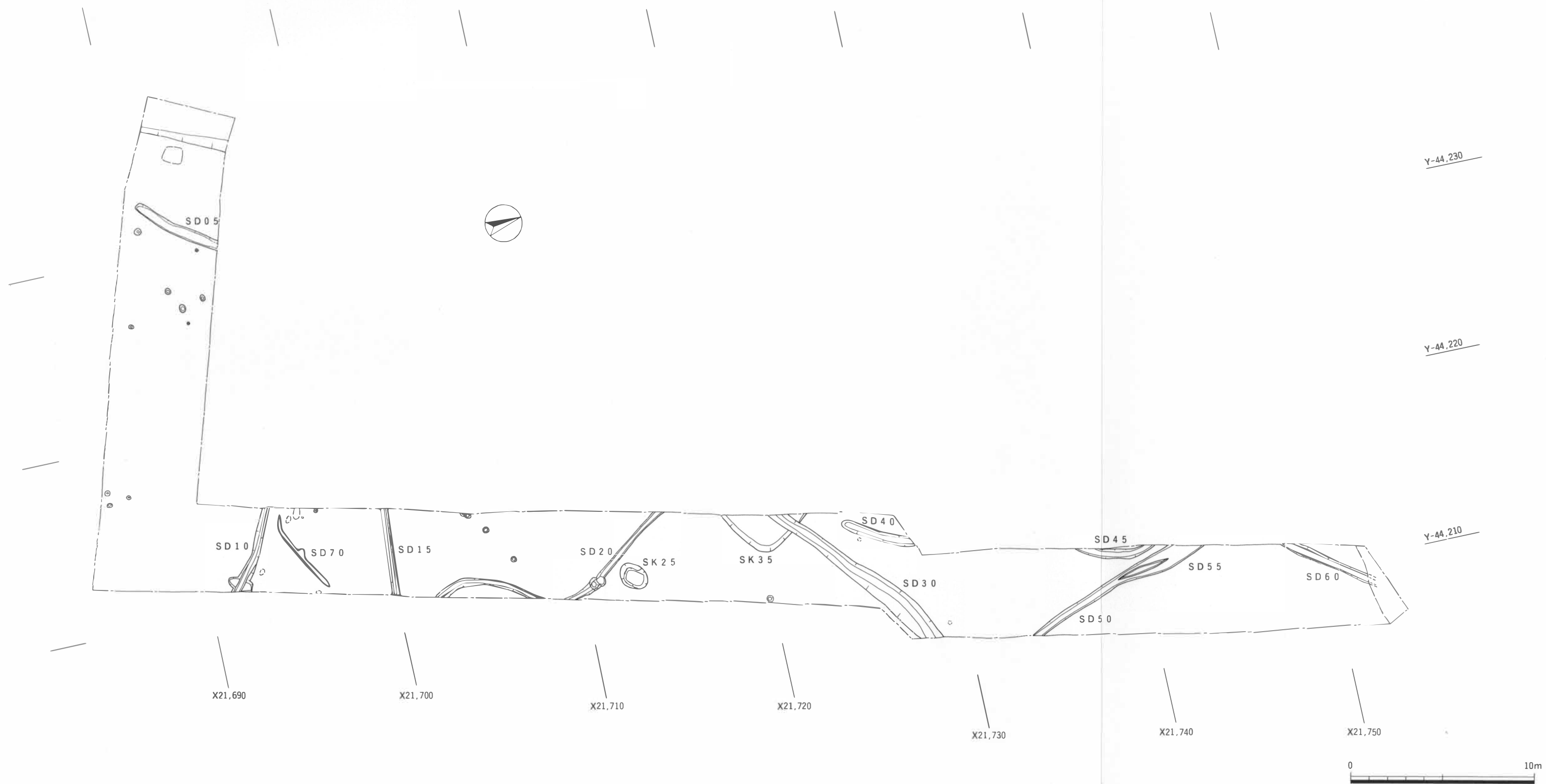


Fig.6 久恵北草場遺構全体実測図 (1/200)

2. 新溝古渡瀬遺跡（第1次調査）

(1) はじめに (Fig.7)

当遺跡は、筑後市大字新溝字古渡瀬496に所在する。平成7年度に施工された県営ほ場整備事業筑後東部地区の支線用排水路設置工事中において、遺構を確認したとの連絡を受け、緊急に確認調査を実施したところである。

調査は平成7年10月3日に実施し、遺構の確認された約20㎡を対象とした。

調査は小林勇作が担当し、調査区からは土壇等を検出した。

(2) 検出遺構

土壇

SK 1 (Fig.8)

上幅径1.1m、下幅径0.6~0.7m、深さ0.28mを測る円形状の土壇である。黒茶色土を基調とした埋土で、出土遺物は皆無であった。

落込み跡

SX 2 (Fig.8)

SK 1の南側では黒茶色粘質土を埋土とする落込み状の痕跡を確認した。堆積土中からの出土遺物はなく、土層の状況から丘陵の落込み跡と考えられる。

(3) 出土遺物

当調査区からの出土遺物はない。

(4) 小結

調査の結果、明確な遺構としては土壇1基のみの検出となり、遺跡の全体像を知るまでには至らないこととなったが、周囲の地形からは遺跡の存在が十分考えられるところである。今回、僅かではあるが遺構の存在が明らかにされたことにより、遺跡の範囲を知るうえで今後の資料として活用されることを願っている。



Fig. 7 新溝古渡瀬遺跡調査地点位置図 (1/2,500)

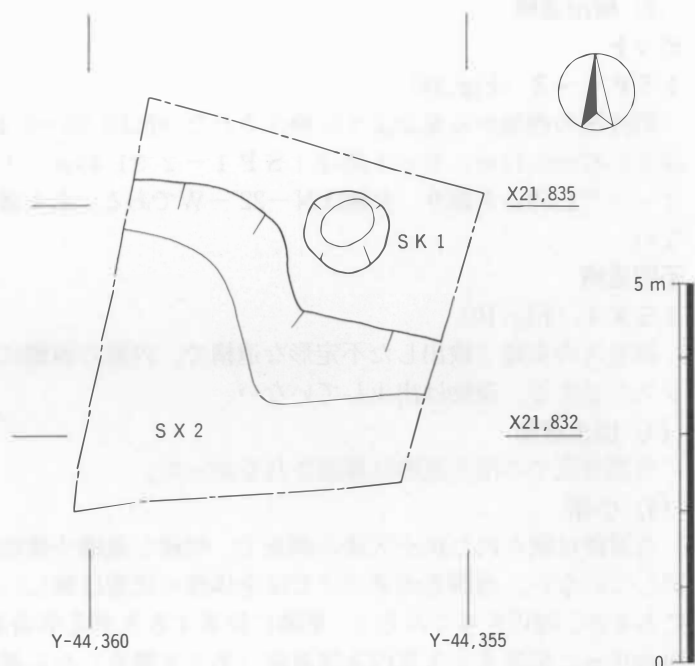


Fig. 8 新溝古渡瀬遺跡遺構全体実測図 (1/100)

3. 久恵内次郎遺跡 (第1次調査)



Fig. 9 久恵内次郎遺跡 (第1次調査) 調査地点位置図 (1/2,500)

(1) はじめに (Fig.9)

当遺跡は、筑後市大字久恵字内次郎511-1に所在する。一帯は水田地帯で標高17m位の低位段丘上にある。調査は、平成7年度に施工された農地整備事業支線用排水路設置範囲において、遺構を確認した約80㎡を実施した。調査期間は平成7年7月18日から同年9月28日までで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当し、田中剛の協力を得た。調査の結果、調査区からは溝、ピットを検出した。以下、その成果について報告する。

(2) 検出遺構

ピット

1 SP 1～3 (Fig.10)

調査区の西端から並ぶように検出された。径は0.25～0.40m、深さ0.07～0.11m、ピット間は1 SP 1-2で1.40m、1 SP 2-3で1.60mを測り、主軸はN-22°-Wである。出土遺物はない。

不明遺構

1 SX 4 (Fig.10)

調査区の東端で検出した不定形な遺構で、内部の西側にはテラスを呈する。遺物は出土していない。

(3) 出土遺物

当調査区での出土遺物は確認されなかった。

(4) 小結

当遺跡は限られた狭小区域の調査で、明確な遺構や遺物は確認していない。当調査成果だけでは全体像の把握は難しい状況であるが、周辺をみると、東隣に位置する久恵北草場遺跡、南約10mに位置する久恵内次郎遺跡 (第2次調査) から縄文時代の遺構や遺物を確認しており、周辺に集落本体が存在していた可能性が十分考えられる。

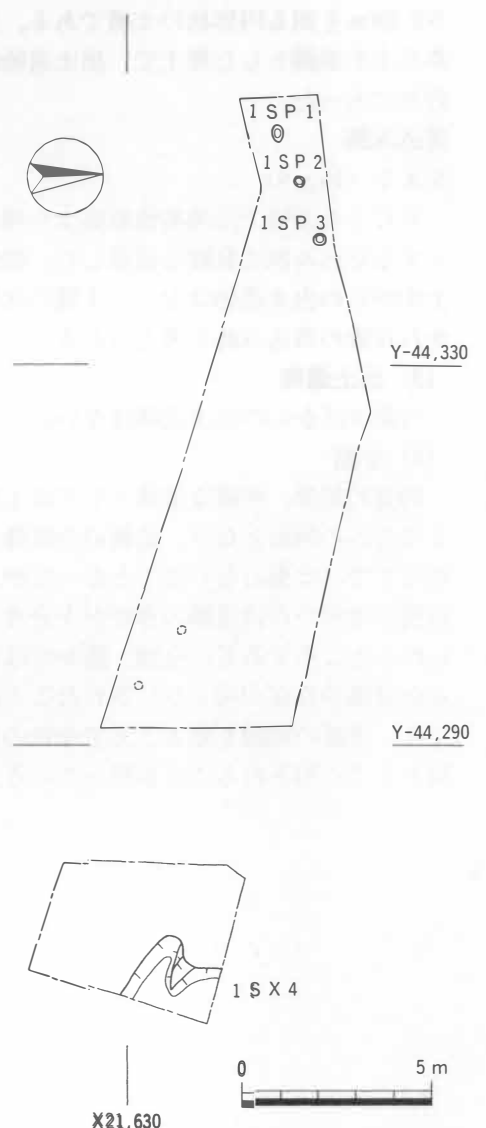


Fig. 10 久恵内次郎遺跡 (第1次調査) 遺構全体実測図 (1/200)

4. 久恵内次郎遺跡（第2次調査）

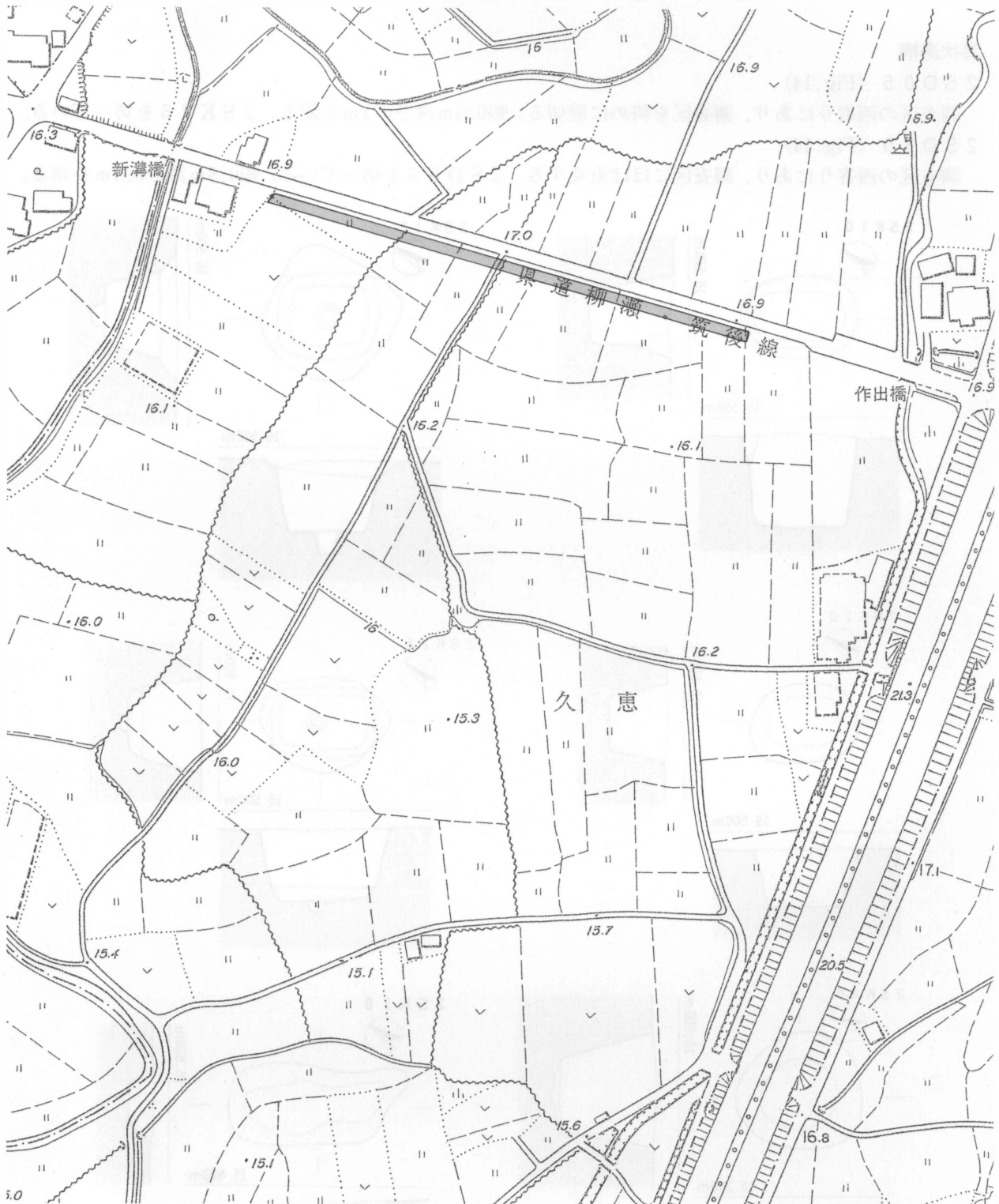


Fig.11 久恵内次郎遺跡（第2次調査）調査地点位置図（1/2,500）

(1) はじめに

今回報告する久恵内次郎遺跡は筑後市大字久恵字内次郎に所在する。水路新設による掘削部分について記録保存の措置をとったものである。調査は永見秀徳が担当し、野田洋子の協力を得た。調査面積は880㎡で、調査期間は平成8年2月1日から3月31日であった。

(2) 検出遺構

溝・落とし穴・土壇・ピットを確認した。

溝状遺構

2SD05 (Fig.14)

調査区の西寄りにあり、調査区を斜めに横切る。幅0.3m深さ0.1mを測る。2SK25を切っている。

2SD30 (Fig.14)

調査区の西寄りにあり、調査区にほぼ直交する。2SD05を切っている。幅0.8m深さ0.3mを測る。

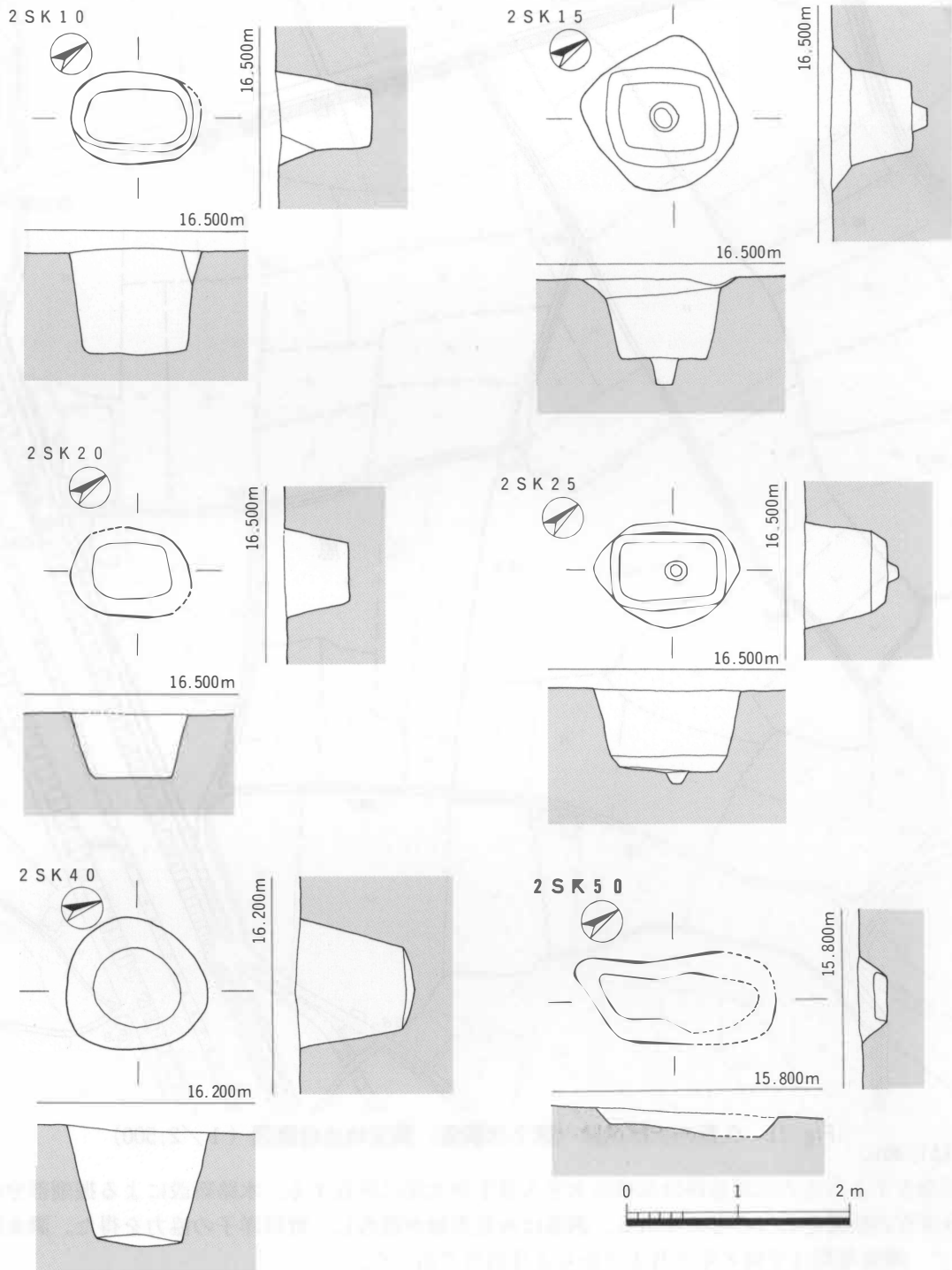


Fig.12 落とし穴・土壇実測図 (1/60)

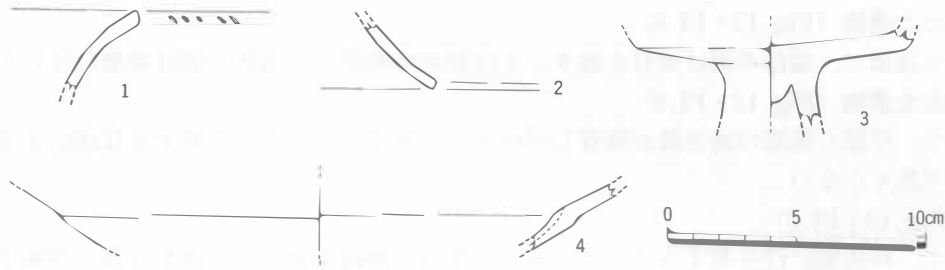


Fig.13 久恵内次郎遺跡（第2次調査）出土遺物実測図（1/3）

No	遺構	種別	器種	口径	底径	器高	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-No
1	2SD45	弥生	甕				口縁部細片	ナデ					淡乳灰色	砂粒含	やや良	端部に面有	端部の面に刻目有	1
2	2SD45	弥生	器台				底部細片				不明	不明	赤茶色	砂粒含	不良			2
3	2SK40	弥生	高坏				接合部のみ				ナデ	不明	赤茶色	砂粒多	やや不良			1
4	表採	弥生	高坏				坏部1/6				不明	不明	灰色	砂粒含	不良			1

Tab.2 久恵内次郎遺跡（第2次調査）出土遺物観察表

2SD35 (Fig.14)

調査区の東寄りにあり、ほぼ東西方向に走る。幅0.3m深さ0.1mを測る。

2SD45 (Fig.14)

調査区の東寄りにある、大きな落ち込み状の大溝である。幅13m深さ1.0mを測る。北側は東に向かって蛇行していると思われる。

落とし穴

2SK10 (Fig.12・Pl.6)

調査区の西寄りにあり、主軸はN-33°-Eである。長軸1.2m短軸0.8m深さ0.8mを測る。底面にはピット等は認められなかった。

2SK15 (Fig.12・Pl.7)

調査区の西寄り、2SK10の東にあり、主軸はN-32°-Eである。長軸1.4m短軸1.3m深さ0.7mを測る。底面には、逆茂木の痕跡と考えられる径0.3m深さ0.25mのピットが1個確認された。

2SK20 (Fig.12・Pl.7)

調査区の西寄り、2SK15の東にあり、主軸はN-40°-Eである。長軸1.3m短軸0.9m深さ0.8mを測る。底面には、逆茂木の痕跡と考えられる径0.2m深さ0.25mのピットが1個確認された。

2SK25 (Fig.12・Pl.8)

調査区の西寄り、2SK20の東にあり、主軸はN-35°-Eである。長軸1.1m短軸0.8m深さ0.6mを測る。底面にはピット等は認められなかった。

2SK40 (Fig.12・Pl.8)

調査区の中央附近にあり、主軸はN-29°-Eである。長軸1.0m短軸0.5m深さ0.15mを測る。底面にはピット等は認められなかった。

土壌

2SK50 (Fig.12)

調査区の東寄りにあり、主軸はN-20°-Eである。長軸1.3m短軸1.2m深さ1.0mを測る。

(3) 出土遺物

弥生土器が出土した。以下、遺構別に報告する。

2 S D 4 5 出土遺物 (Fig.13・Pl.9)

1は甕の口縁部で、端部の面に刻目を施す。2は器台の底部で、端部の面は接地しないものである。

2 S K 4 0 出土遺物 (Fig.13・Pl.9)

3は高坏で、坏部と脚部の接合部が残存している。坏底部を粘土栓で閉塞する技法によるものかもしれないが、判然としない。

表採遺物 (Fig.13・Pl.9)

4は高坏で、坏体部に段を有するタイプである。器面の磨滅が激しく、調整は全く不明である。

(4) 小結

落とし穴

今回の調査では、5基の落とし穴状の遺構を確認した。通常、この種の遺構の大多数には底面に杭の痕跡をみるものが多いが、今回の調査で確認したものもその類型である。遺構の時期については1 S K 4 0から弥生土器が出土した以外は、出土遺物が皆無であるため確定できない。

古賀正美氏は安武地区遺跡群で確認した落とし穴遺構をA・B・Cの3つに分類し、各遺跡での配列についても論及している。(註1) 富永直樹氏は、それをベースにしつつ、さらにD・Eを加えた5つに分類し、その配列と配列ごとの狩りの方法の違いにも論及した。(註2) 富永氏の分類には若干の問題点もある(註3)が、九州島内の落とし穴遺構を分類整理した点で評価が高い。特に配列の違いによりI型～III型に分類し、それぞれの狩猟方法を復元している点は興味深い。それによれば、I型とIII型は受動的狩猟方法で、動物が自然に落ちるのを待つという消極的な狩りの姿である。それに対してII型は能動的な狩猟方法で、巻狩り式に追い込んで捕獲するという積極的な狩りの姿が復元できる。

今回の調査は細長い調査区の設定となったため、落とし穴の配列について確定的なことは論じられない。しかし、複数の落とし穴が確認されていることから、I型の配置をとることは考えにくい。ただし、確認した落とし穴遺構が同一時期に機能していたかどうかは、出土遺物が極めて少ない(註4)ため検証することができない。したがって、I型の配置を完全に否定することは不可能であるが、一応今回は複数が同一時期に機能していたと判断したい。だとすると、今回の調査範囲のなかでいえば、III型の可能性が高かろう。今回確認された溝状遺構が水場として機能していた可能性も考えると、III型の配置と考えるのが自然であるともいえよう。II型を明確に否定することはできないが、可能性を積極的に示唆する状況もなく、今回の遺構配置から考えると、II型は選択肢から外してよさそうである。つまり、いいかえれば、今回調査した範囲では巻狩り的な追い込み猟ではなく、獲物が罠にかかるのを待つ受動的な狩りが行われていたことを意味する。しかしこのことは、この地域一帯で巻狩り的な追い込み猟が行われていた可能性を否定するものではない。いずれにしても、隣接地を含めた周辺地の調査の進展が期待されるところである。

また、底面に逆茂木を持たないタイプのものが含まれていることも興味深い。とくに2 S K 4 0は弥生時代の落とし穴である可能性が高く、縄文時代晩期から弥生時代にかけて、豚ではなく野生の猪を一時飼育していた事例(註5)から考えても、生け捕り用の施設として理解して良いのではないだろうか。

久恵内次郎遺跡の景観

今回の調査は水路敷のみの調査であったため、非常に細長い調査区の設定を余儀なくされた。そのため、どのような立地環境に本遺跡が展開していたかは明らかにできない。しかし、南側に縄文時代早期および、弥生時代から古墳時代にかけての集落が展開していたとみられることから、それを手掛かりに推測してみたい。

縄文時代早期の集落に伴う落とし穴が展開していたかどうかは判然としないが、少なくとも弥生時代にはそれらの集落の周辺に落とし穴をつくり、動物を捕獲していたのであろう。落とし穴は動物が水場を求めて集まる地形的特色を利用して設けられた。そして、本遺跡周辺で捕獲した猪等を南側の集落で一時

飼育した可能性もある。

いずれにしても、面的な調査がほとんど実施されていないので、周辺の調査事例の増加を待って、再度論考する機会が与えられることを期待したい。

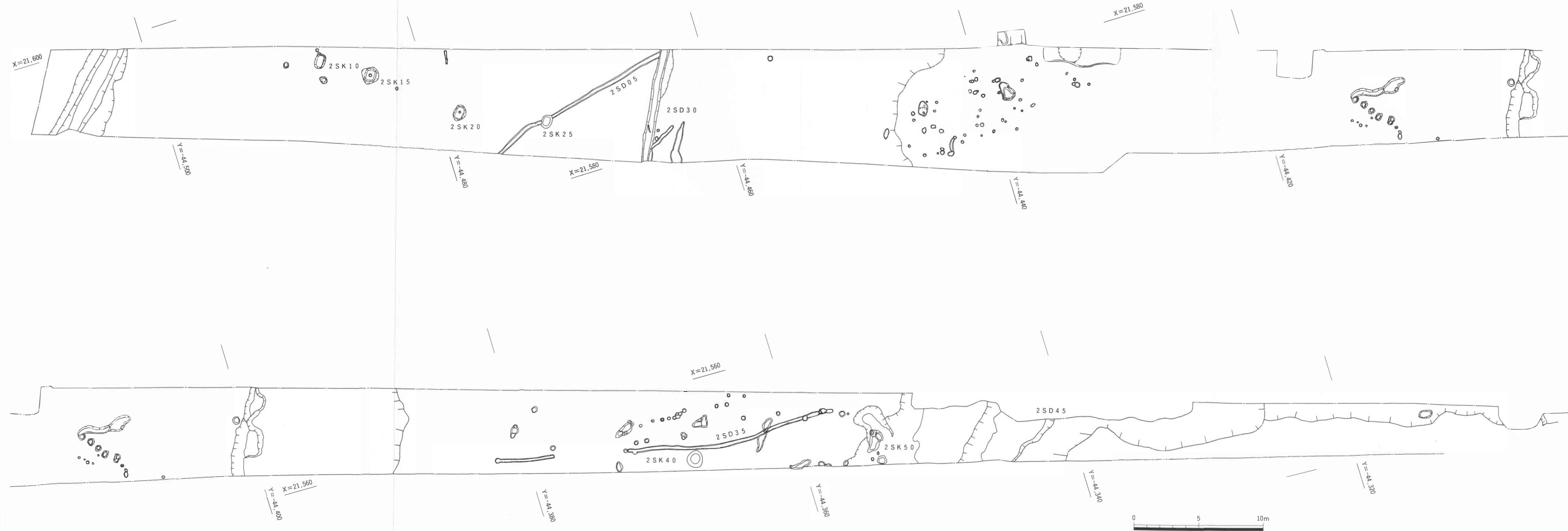
註1 古賀正美 1989 「おとし穴遺構について」『安武地区遺跡群II 久留米市文化財調査報告書第60集 1989 久留米市教育委員会』所収

註2 富永直樹 1989 「九州のおとし穴遺構について」『安武地区遺跡群II 久留米市文化財調査報告書第60集 1989 久留米市教育委員会』所収

註3 富永氏は大分類をA-Eの5分類としたが、氏のいうD類は平面形態を除けば他のいずれかに分類可能なものである。よって、大分類は杭の本数や配置により、中分類で平面形態を扱うほうが合理的であろう。したがって、D類は欠番とし、平面形態が隅丸方形のものを3型、円形のものを4型とすべきであろう。E類は、長軸の片側や両端に偏って深いピットのあるものをあて、特に小分類で片側にのみピットのあるものをa、両側にあるものをbとしたい。つまり、長軸の両端に深いピットがある、平面形が楕円形を呈する遺構はE-2bとなる。

註4 落とし穴遺構から遺物(特に時期決定の基準となる土器)が出土する比率は極めて低い。富永氏は前掲の文中で、九州全体で516基中僅かに34例(7%)に過ぎないことを指摘している。

註5 小澤智生 2000 「縄文・弥生時代に豚は飼われていたか?」『季刊考古学 第73号 雄山閣出版』所収



5. 久恵川ノ上遺跡 (第1次調査)

(1) はじめに
今回報告する久恵川ノ上遺跡は筑後市大字久恵字川ノ上に所在する。面工事による削平部分について記録保存の措置をとったものである。調査は永見秀徳が担当し、野田洋子の協力を得た。調査面積は2,250㎡で、調査期間は平成8年1月5日から3月29日であった。



Fig. 15 久恵川ノ上遺跡 (第1次調査) 調査区位置図 (1/2,500)

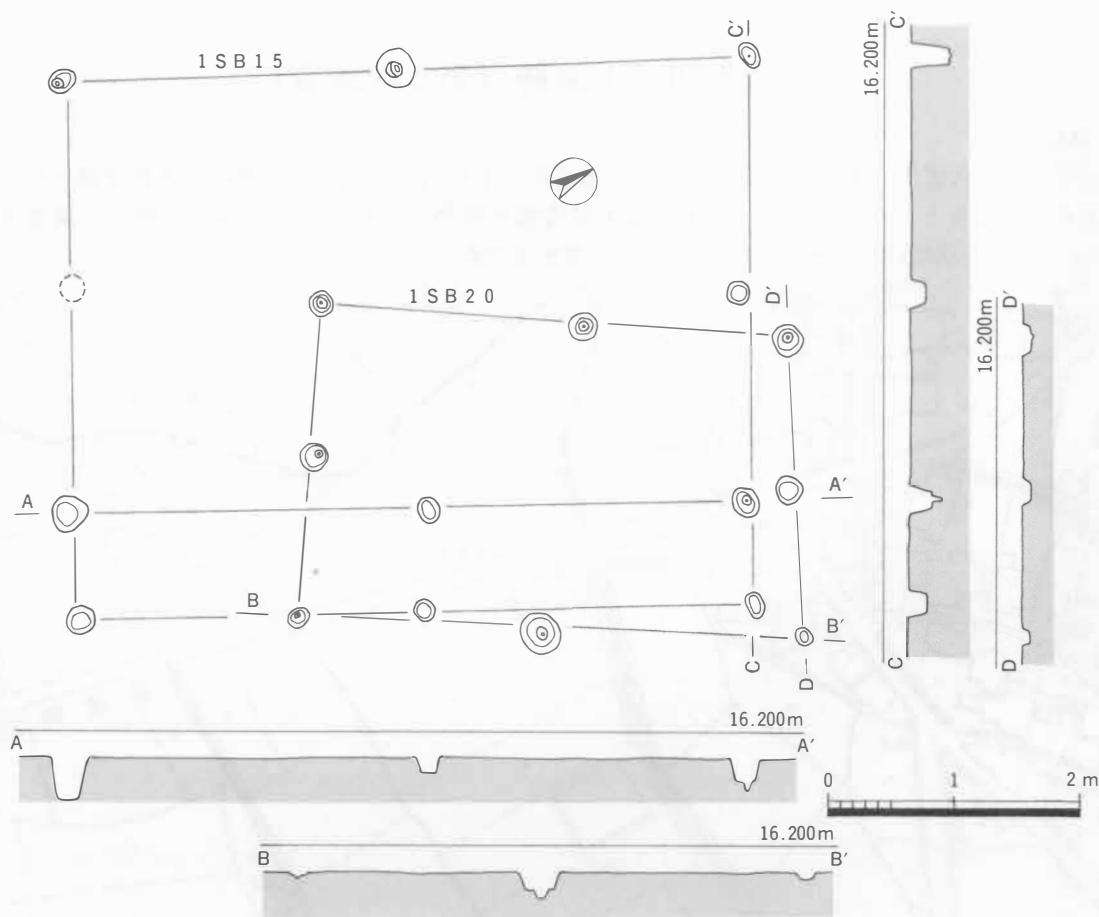


Fig.16 掘立柱建物実測図 (1/60)

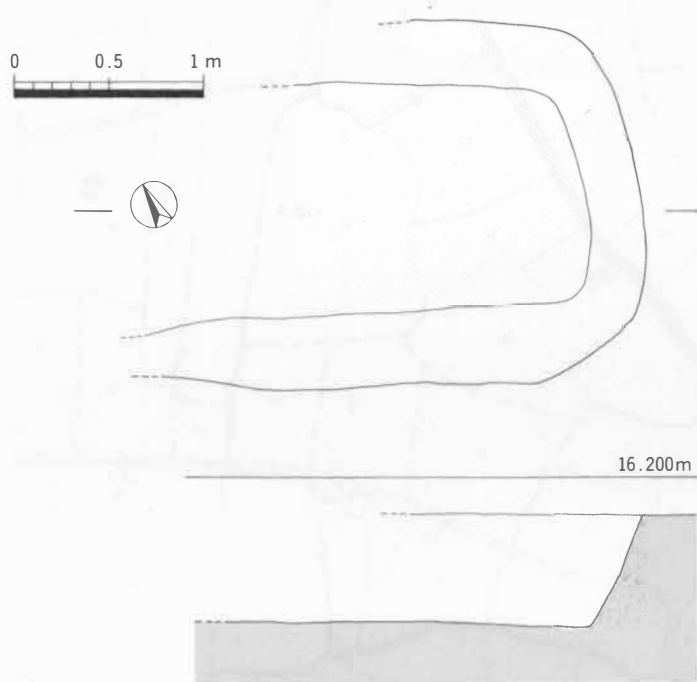


Fig.17 1SK10実測図 (1/40)

(2) 検出遺構

掘立柱建物・溝・土壌を確認した。以下、遺構種類別に報告する。

掘立柱建物

1SB15 (Fig.16・Pl.10)

調査区の南西にあり、2間×2間で東側にのみ底がつく1面底の建物である。

1SB20 (Fig.16・Pl.10)

調査区の南西にあり、2間×2間の規模である。

溝

1SD05 (Fig.20)

調査区の西側を走る溝で、概ね幅1m深さは0.1mを測る。

土壌

1SK10 (Fig.17・Pl.11)

調査区の西にあり、主軸はN-50°-Wである。長軸は調査内で2.5m短軸1.9m深さ0.6mを測る。

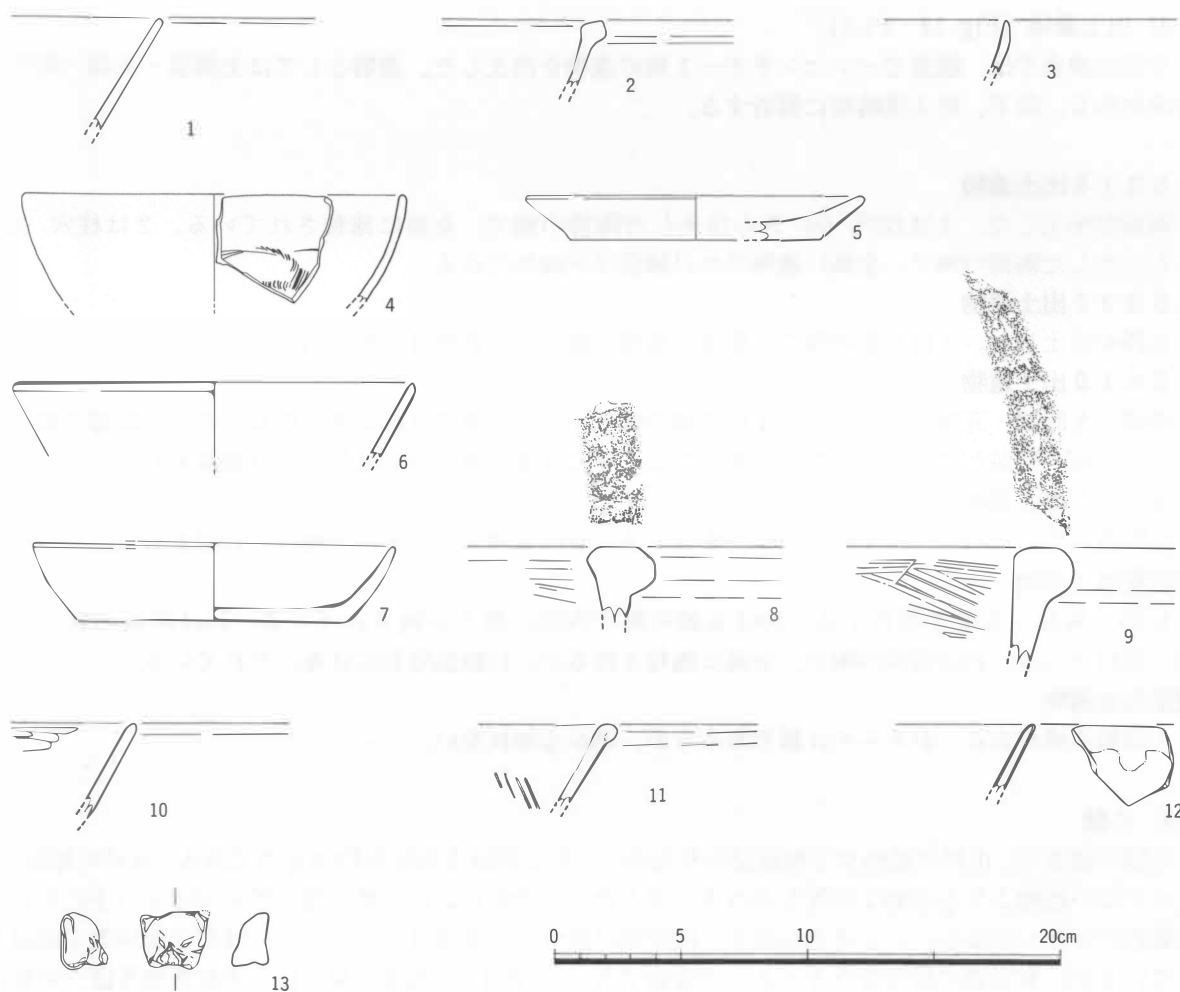


Fig.18 久恵川ノ上遺跡出土遺物実測図（1／3）

No.	遺構	種別	器種	口径	底径	器高	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部形状	備考	R-No.
1	1SB15 (c)	陶器	碗				細片	施釉	施釉	施釉			素地:淡灰色 釉薬:緑灰色	微砂粒含	良	外方にひらく		1
2	1SB15 (g)	陶器	鉢				細片	施釉	施釉	施釉			素地:淡灰色 釉薬:灰白色	砂粒含	良	小さな玉縁状		2
3	1SB20 (e)	瓦器	碗				細片	不明	不明	不明			灰色	精良	不良	内湾		1
4	1SK10	土師	皿	13.4	10.0	1.8	1/5	不明	不明	不明	不明	不明	淡黄茶色	微砂粒含	不良	大きく外方にひらく		1
5	1SK10	瓦器	碗	16.0			1/10	横ナテ	横ナテ	ナテ			淡灰色	精良	やや良	外方にひらく		2
6	1SK10	青磁	碗	15.2			1/8	施釉	施釉	施釉			素地:淡灰色 釉薬:淡緑色	微砂粒含	良好	内湾		3
7	1SD05	土師	坏	14.4	10.6	3.1	1/2	不明	不明	不明	不明	不明	暗淡黄色	精良	やや良	わずかに内湾		1
8	1SD05	土師	土鍋				細片	ナテ	ナテ	刷毛			淡黄色	角閃石・砂粒含	やや良	玉縁状		2
9	1SD05	土師	土鍋				細片	ナテ	ナテ	刷毛			黄灰色	角閃石	やや良	玉縁状		3
10	包含層	瓦器	碗				細片	横ナテ	横ナテ	匏磨き			暗灰色	精良	良	外方にひらく		1
11	包含層	陶器	鉢				細片	ナテ	横ナテ	横ナテ 摺目			紫茶色	微砂粒含	良	玉縁状		3
12	包含層	青磁	碗				細片	施釉	施釉	施釉			素地:白灰色 釉薬:黄緑色	微砂粒含	良好	わずかに外反		2
13	攪乱	土師	像				頭部のみ						淡乳茶色	精良	良		豚か?	1

Tab.3 久恵川ノ上遺跡出土遺物観察表

(3) 出土遺物 (Fig.18・Pl.11)

今回の調査では、総量でバンコンテナー1箱の遺物を出土した。遺物としては土師器・瓦器・陶器・青磁がある。以下、出土遺構別に報告する。

1SB15 出土遺物

陶器が出土した。1は柱穴(e)から出土した陶器の椀で、全面に施釉されている。2は柱穴(g)から出土した陶器の鉢で、全面に施釉され口縁部は玉縁状である。

1SB20 出土遺物

瓦器が出土した。3は瓦器の碗で、器面は磨滅が激しく、調整は不明である。

1SK10 出土遺物

青磁・土師器・瓦器が出土した。4は青磁の碗で、内面に楯目文様がみられる。5は土師器の皿であるが、器面の磨滅が激しく、調整は不明である。6は瓦器の碗で外方にひらく口縁部をもつ。

1SD05 出土遺物

土師器が出土した。7は土師器の坏である。8・9は土鍋で、ともに玉縁状の口縁をもつ。

包含層出土遺物

瓦器・陶器・青磁を報告する。10は瓦器の椀で内面に磨きが施されている。11は陶器の鉢で、内面に摺目がある。12は青磁の碗で、全面に施釉されるが、口縁部外面には釉がたれている。

攪乱出土遺物

土師器の像がある。おそらくは豚であろうが、猪かも知れない。

(4) 小結

今回の調査で、中世の建物が2棟確認されたが、うち1棟は1面庇を持つものである。庇付の建物は、そうでない建物よりも主要な位置を占めると考えれば、中世における武士等の居宅のなかの中心をなす建物群のひとつではないかと考えられる。同時期の庇付きの建物は、筑後市内では高江遺跡等で確認されているが、有力者の居宅等を考えるのが妥当であろう(註1)。筑後市域をはじめ筑後地方は、中世に社寺による荘園が非常に発達した地域としても著名であるが、これらの居宅も荘園の在地領主(実質管理者)や、その配下の有力者の住居として考えるのが妥当であろう。

当時のこの地は、上妻荘に含まれると考えられるが、北側に広川荘、東に上妻荘(ともに公領)があり、西には安楽寺領の水田荘が接する上妻荘周辺部にあたる(註2・註3)。上妻荘をはじめ公領は平安時代末期には平家方とつながりが強く、一種の平家領と捉えることも可能である。したがって、公領のあったところやその周囲には、現在でも平家の落人伝説や、源氏の平家追討の際の合戦場跡と伝えられる場所が散在したりする。例えば、今回の調査地点の西1kmには平宗清が開いたと伝えられる宗清寺があったり、さらに西の尾島地区には、平家追討の際の合戦場跡の伝承もある。もちろん、これらのことは史実とは異なるものの、当時の平家領(=公領)の所在を暗示するものとして興味深い。このことについては、さらなる各地のデータの集積が必要であろう。実際、源氏方により本領安堵されて源氏支配に組み込まれていったとはいえ、本来は天皇家に繋がる平家一門の支配下にあったことを、平家一門の末裔であることを称することによって誇示したと考えられる。

一方水田荘は、当時の九州を宇佐の彌勒寺と2分する程の勢力を誇った安楽寺領として著名である。代々大鳥居氏が水田天満宮別当として名を連ねていることから、水田荘が安楽寺領のなかでも特別な位置を占めていたことが伺い知れる。両者は常に緊張関係にあり、たびたび衝突を繰り返していたことが記録に残っている。

今回の調査地点は、荘園の周辺部に位置している。そういった場所には「屋敷」や「坊」のつく地名が散見され(註4)、中世の館跡が多く存在する可能性が高い。今回調査した本遺跡も、その立地から考えると上妻荘の周辺部に配置された居宅で、緊張関係にある周辺荘園に対する備えとして機能していたのであろう。

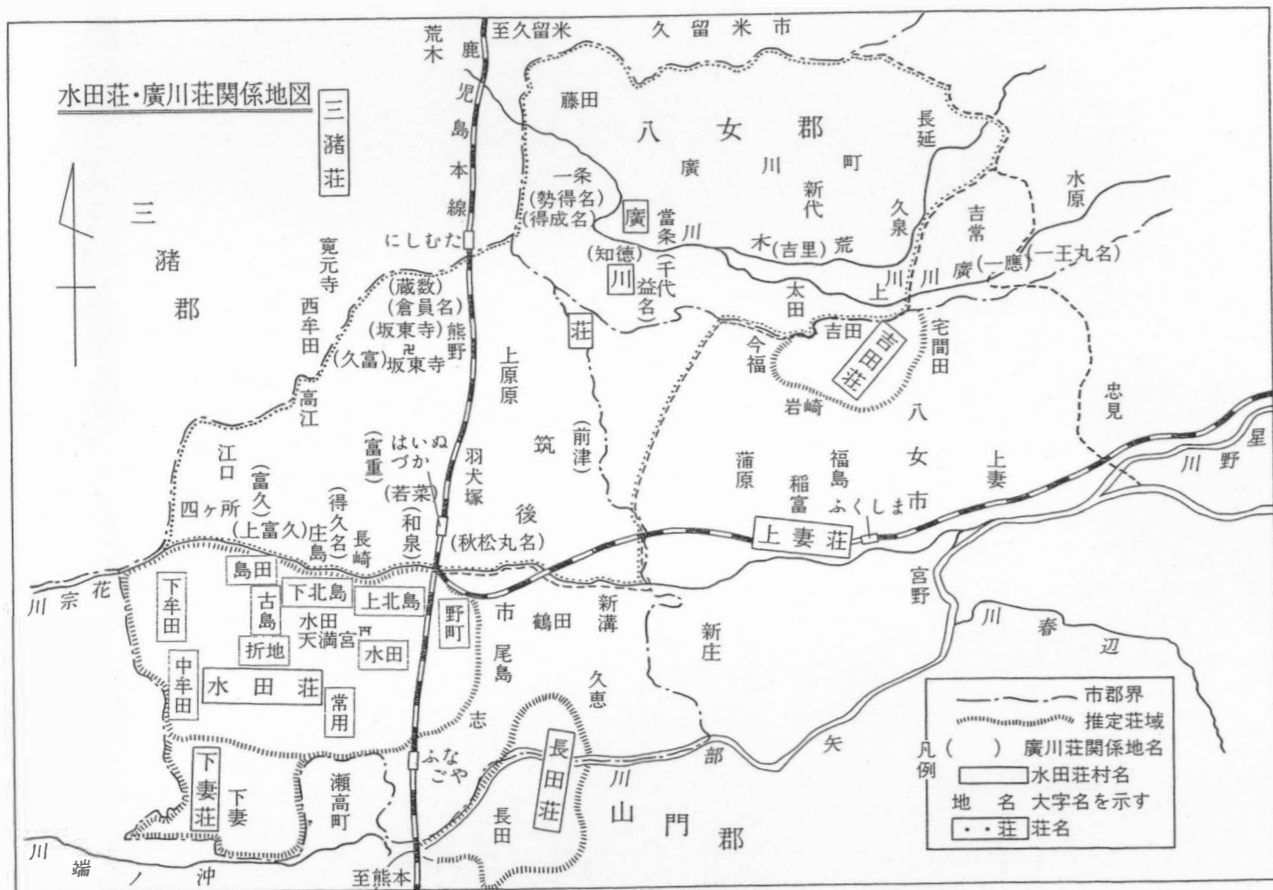


Fig. 19 筑後市附近の中世荘園 (文献註3から転載)

現段階では、この地域の中世の荘園の全容も明らかでないが、今回の調査のような発掘調査事例と、文献史学、歴史地理学等の関係により、まだまだペールに包まれている中世の地域史が少しずつ紐解かれてゆくことを願ってやまない。発掘調査事例、文献資料および分析成果の増加に期待したい。

- 註1 永見秀徳 1991 「第IV章 小結」『高江遺跡 筑後市文化財調査報告書第7集 筑後市教育委員会』所収
- 註2 工藤敬一 1994 「鎌倉初期の筑後国の荘園公領—歴博所蔵新史料による俯瞰的考察—」
- 註3 松崎英一 1997 「中世」『筑後市史第1巻 筑後市 1997』所収
- 註4 小林勇作 1999 「IV総括」『長崎坊田遺跡 筑後市文化財調査報告書第23集 筑後市教育委員会』所収

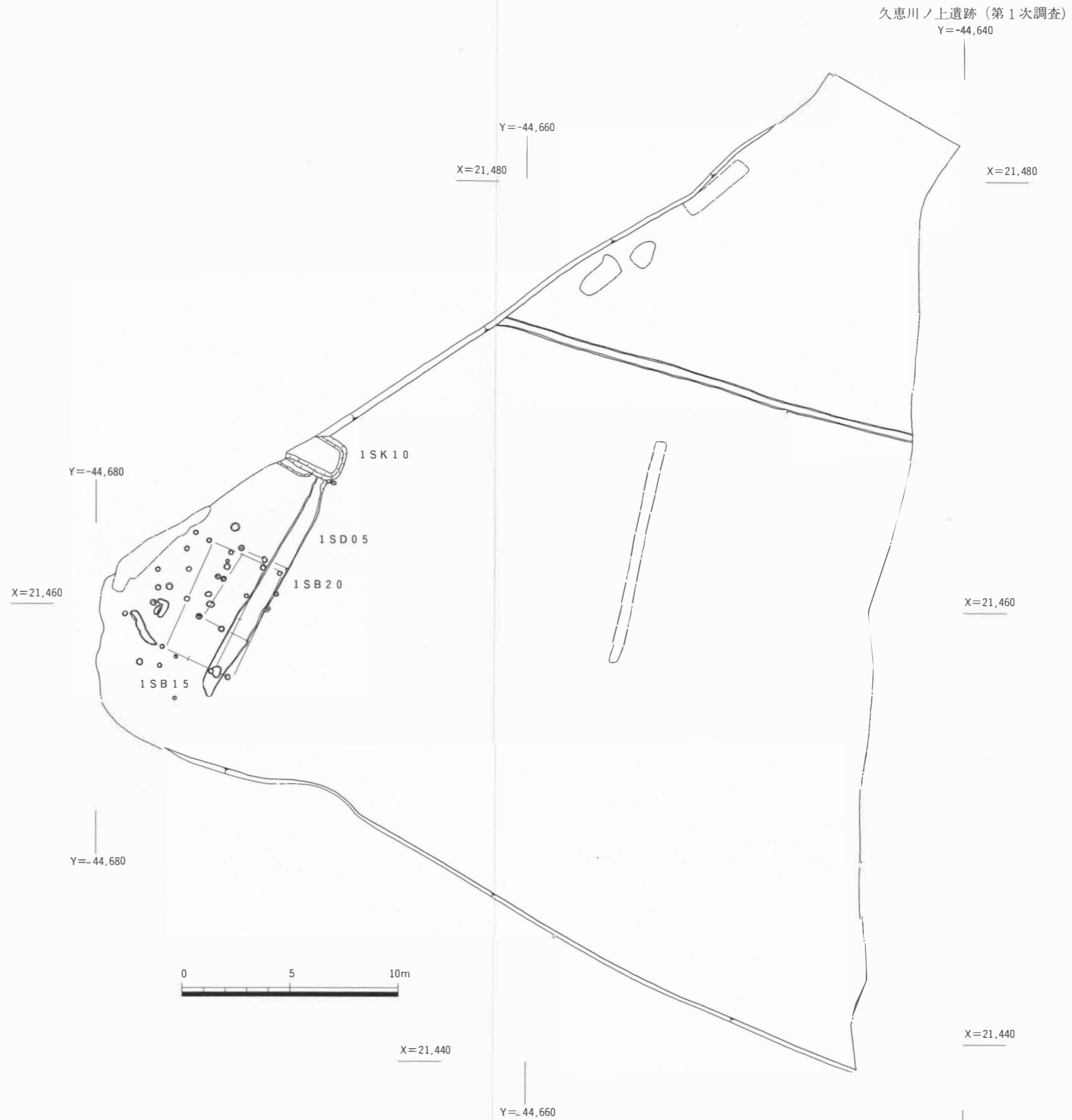


Fig. 20 久恵川ノ上遺跡遺構配置図 (1/200)

6. 久恵岸ノ下遺跡 (第1次調査・第2次調査)

(1) はじめに
 今回報告する久恵岸ノ下遺跡は筑後市大字久恵字岸ノ下に所在する。第1次調査の調査面積は、約2,000㎡で、調査期間は平成6年10月1日から平成7年3月29日であった。調査対象地は水路新設による掘削部分と、面工事による削平が地下の遺構に影響を及ぼすおそれの生じた部分について、記録保存の措置をとった。調査は田中剛・永見秀徳が担当し一部で大島真一郎・野田洋子・岡崎陽子の協力を得た。第2次調査の調査面積は2,300㎡で、調査期間は平成8年1月5日から3月29日であった。調査は塚本映子・永見が担当し、野田の協力を得た。



Fig.21 久恵川ノ下遺跡 (第1次調査・第2次調査) 調査区位置図 (1/2,500)



Fig.22 溝状遺構実測図 (1/100)

(2) 検出遺構

今回の調査は第1次調査と第2次調査に分けて実施したが、報告の段階では一括して報告する。そのため、遺構番号の整理が必要となる。今回の調査ではそれぞれの調査で調査区を複数に分割し、それぞれに独立した仮番号を与えている。それらの混乱をさけるため、遺構番号の先頭に調査次数を表わすアラビア数字をつけたうえでA調査区は000～、B調査区は100～、C調査区は200～の番号を与えた。下の2桁は調査時の仮番号と同一である。ただし、100についてのみ例外的に下3桁が一致している。すなわち、2次調査のA区の仮番号S-3が土壌であった場合は2SD003となるが、2次調査のB調査区のS-100が溝であった場合は2SD100となる。

さらに、今回の報告にあたって、西側の調査区の集合体を西調査区、東側に独立した調査区(第2次調査のC調査区)を東調査区として2つにわけて報告を行いたい。

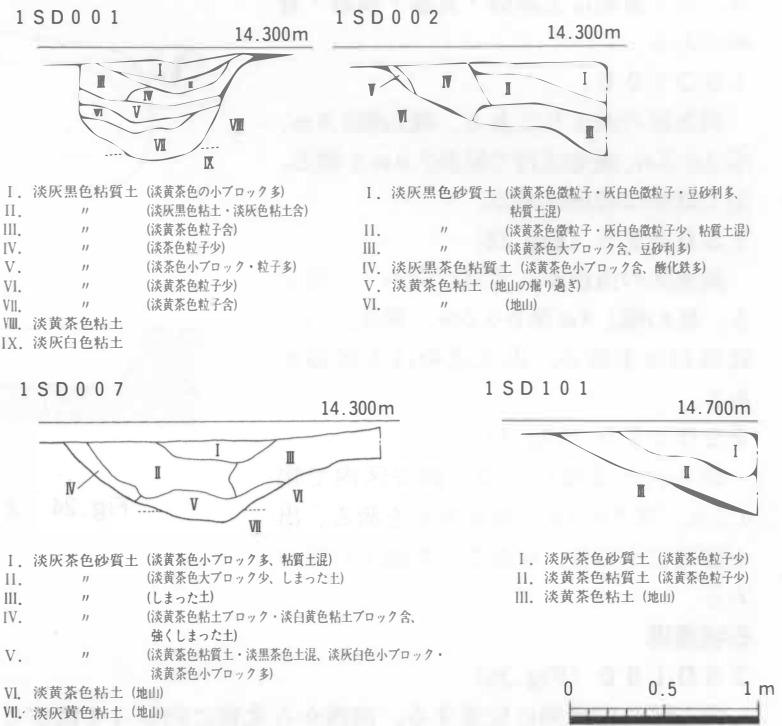


Fig. 23 溝状遺構土層断面実測図 (1/40)

西調査区の遺構

第1次調査と第2次調査をあわせ、溝・土壌・石垣を確認した。

溝状遺構

1SD001 (Fig.22・Pl.15)

調査区の北から南に向かって延びる。概ね幅3.0m深さ0.5m、調査区内で延長10mを測る。延長上にある2SD025とは同一の溝になる。出土遺物は土師器・須恵器・サヌカイト製石鏃がある。

1SD005 (Fig.37)

調査区の東から西に向かって延びる。概ね幅2.0m深さ0.5m、調査区内で延長10mを測る。延長上にある2SD001とは同一の溝になる。出土遺物は須恵器がある。

1SD002 (Fig.22・Pl.15)

調査区の北から南に向かって延びる。概ね幅4.0m深さ0.5m、調査区内で延長17mを測る。延長上にある2SD010とは同一の溝になる。出土遺物は土師器・須恵器がある。

2SD010 (Fig.37)

調査区の西から、さらに西に向かって延びる。概ね幅1.0m深さ0.5m、調査区内で延長17mを測る。延長上にある1SD002とは同一の溝になる。出土遺物は土師器・弥生土器・粘土塊がある。

1SD003 (Fig.37)

調査区の北よりにある。概ね幅3.0m深さ0.5m、調査区内で延長10mを測る。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器がある。

1SD007 (Fig.23・Pl.15)

調査区の南端から東に向かって延びる。概ね幅3.0m深さ0.5mを測る。2SD100の延長部にあた

る。出土遺物は土師器・瓦器・陶器・青磁がある。

1SD006

調査区の西よりにある。概ね幅2.0m、深さ0.5m、調査区内で延長2.0mを測る。

出土遺物は青磁がある。

2SD025 (Fig.22)

調査区の南西から北東に向かって延びる。概ね幅3.8m深さ0.5m、調査区内で延長10mを測る。出土遺物は土師器がある。

2SD120 (Fig.24)

調査区の北端にある。調査区内で幅0.5m、深さ0.4m、延長30mを測る。出土遺物は土師器・須恵器・青磁・白磁がある。

石垣遺構

2SD100 (Fig.38)

調査区の南東隅に位置する。南西から北東に向かって延びており、その方位はN-28°-Eである。また、東端では北東方向にほぼ直角に折れ曲がるが、その先には石垣を確認できなかった。屈曲部の少し西よりには、溝の底面に石敷遺構が認められ、水汲み場のような形態をしている。

石垣本体についてであるが、前面には握り拳大の石を積んでいるが、裏込めは小石混じりの砂を用いている。調査時の観察では、一定の高さまで前面の石垣を積み、その度に裏込めを行ったと考えられる。

東調査区の遺構

溝・土壙等を確認した。以下、遺構別に報告する。

溝状遺構

2SD201 (Fig.39)

調査区の南西から北東に向かって延びる。概ね幅1.1m深さ0.6m、調査区内で延長33mを測る。出土遺物は青磁・縄文土器がある。

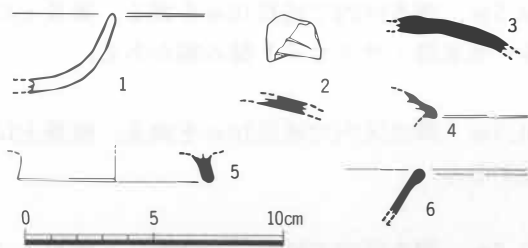


Fig.25 1SD001 出土遺物実測図 (1/3)

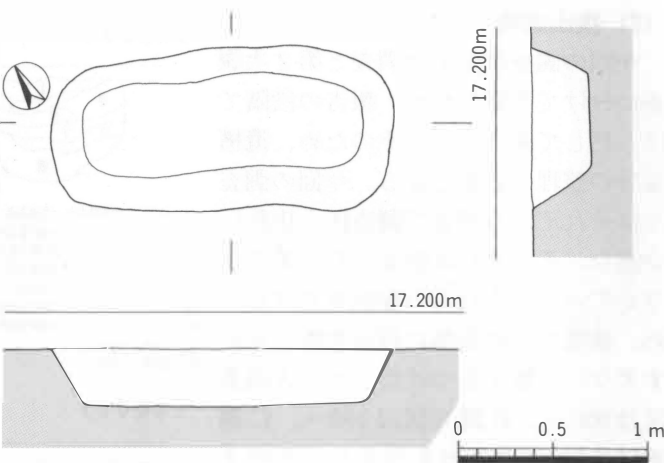


Fig.24 2SK203 実測図 (1/40)

2SD219 (Fig.39)

調査区の南から北に向かって延びる。概ね幅0.5m深さ0.2m、調査区内で延長15mを測る。出土遺物はない。

土壙

2SK203 (Fig.24)

調査区の西よりにある。長軸1.8m短軸0.4m、深さ0.3mを測る。主軸の方位はN-60°-Wである。底面にはピット等は認められない。出土遺物は土師器がある。

(3) 出土遺物

以下、出土遺構別に報告するが、個々の遺物の詳細については、出土遺物観察表を参照されたい。

1SD001 出土遺物 (Fig.25)

土師器・須恵器・石器を出土した。1は土師器の坏で



Fig.26 2SD005 出土遺物実測図 (1/3)

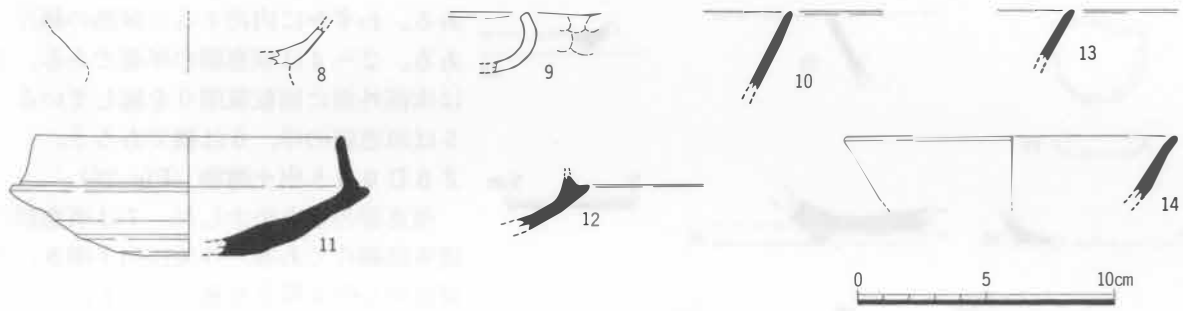


Fig.27 1SD002出土遺物実測図 (1/3)

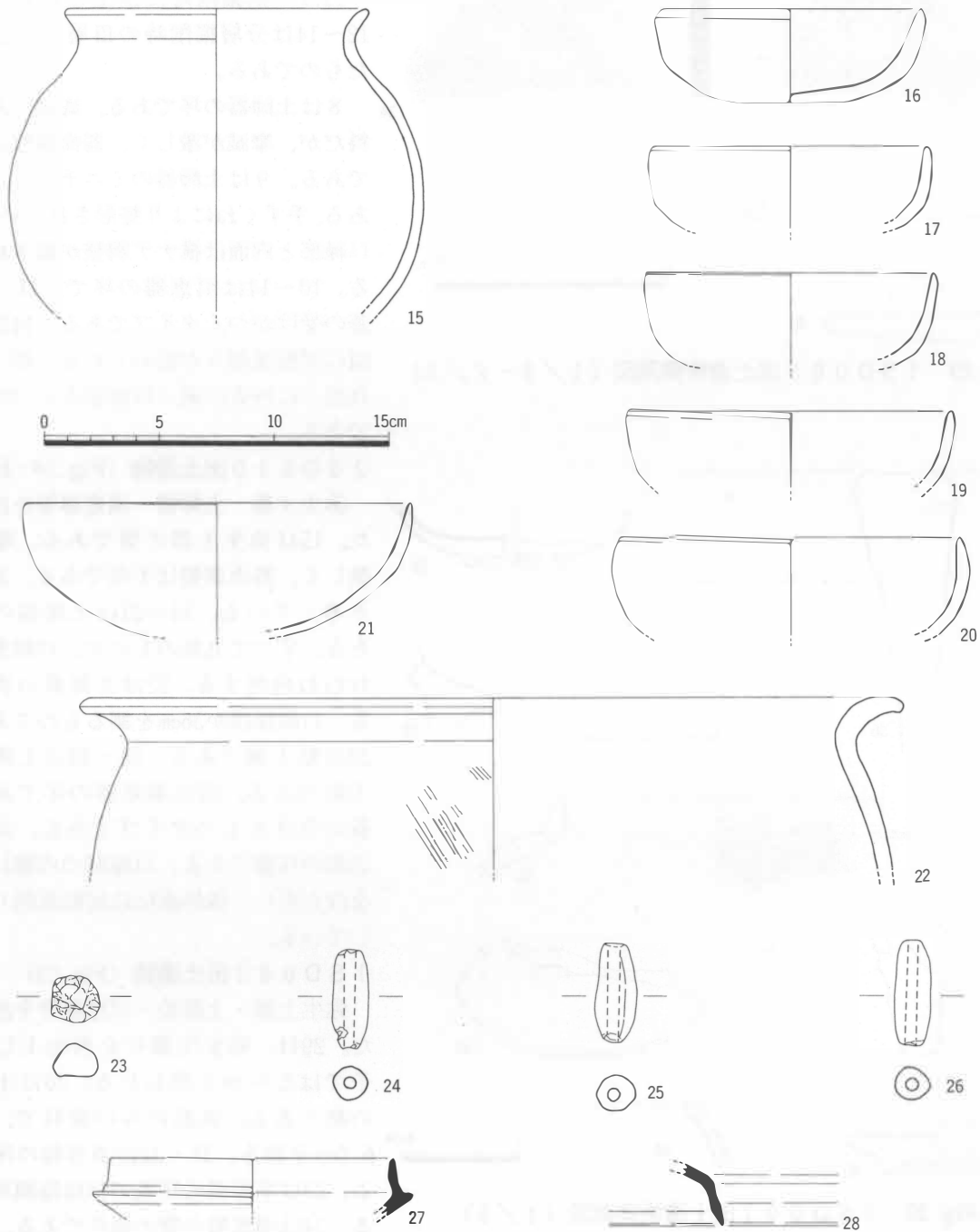


Fig.28 2SD010出土遺物実測図 (1/3)

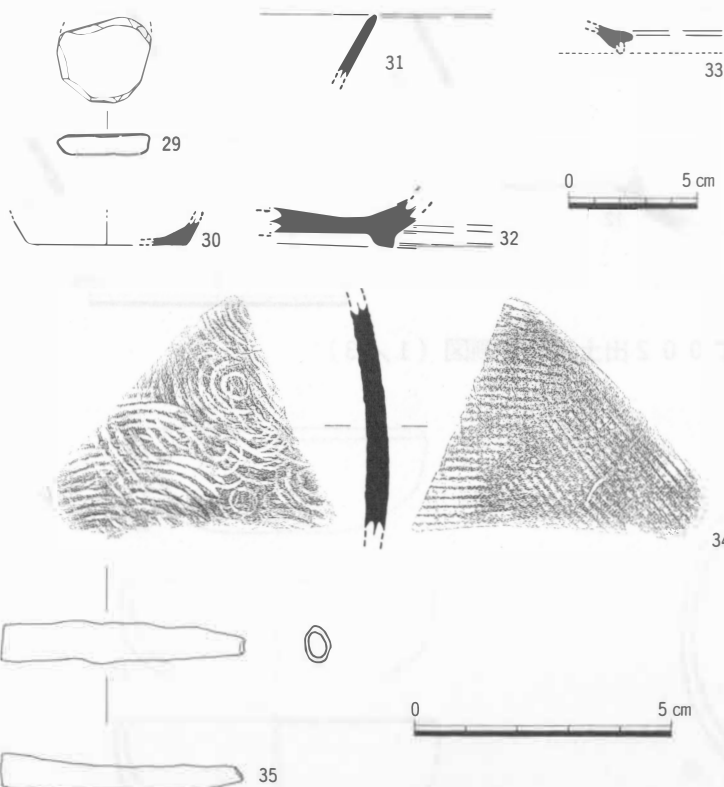


Fig. 29 1SD003出土遺物実測図 (1/3・2/3)

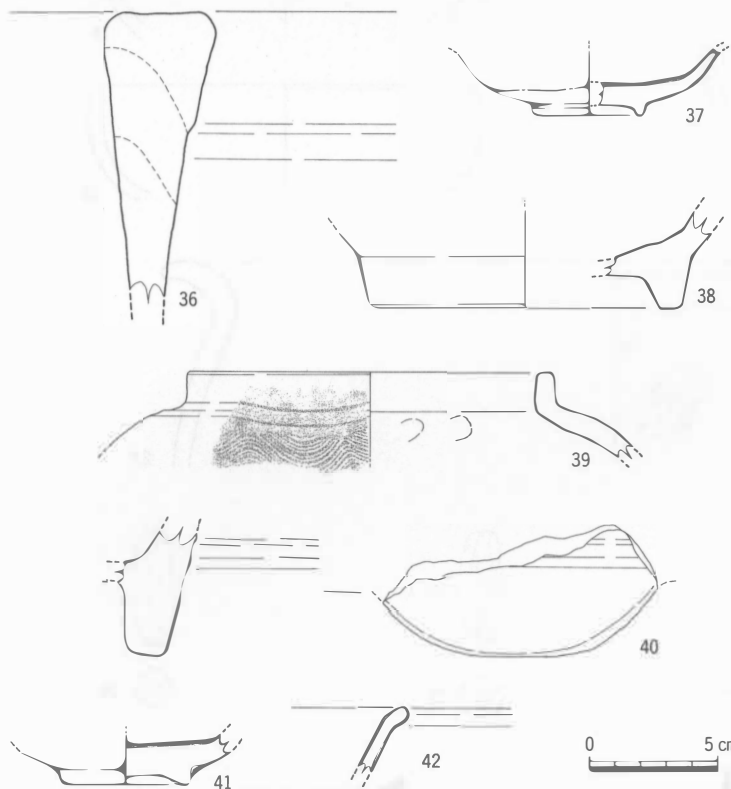


Fig. 30 1SD007出土遺物実測図 (1/3)

ある。わずかに内湾する口縁部の細片である。2～4は須恵器の坏蓋である。2は体部外面に回転篋削りを施している。5は須恵器の坏、6は椀であろう。

2SD005出土遺物 (Fig.26)

須恵器の甕を出土した。7は須恵器の甕体部細片である。外面は格子叩き、内面は同心円文叩きを施している。

1SD002出土遺物 (Fig.27)

土師器・須恵器を出土した。なお、8～11は一括掘削時に出土したもので、12～14は分層掘削時のⅢ層から出土したものである。

8は土師器の坏である。底部のみの資料だが、摩滅が激しく、器面調整は不明である。9は土師器のミニチュア土器である。手づくねにより整形されているが、口縁部と内面は横ナデ調整が施されている。10～14は須恵器の坏で、11・12は蓋の受けがつくタイプである。11は外底面に回転篋削りが認められる。13・14は真直ぐに外方に開く口縁部をもつタイプである。

2SD010出土遺物 (Fig.28・Pl.16)

弥生土器・土師器・須恵器等を出土した。15は弥生土器の甕である。摩滅が激しく、器面調整は不明である。流入品と考えている。16～21は土師器の坏である。すべて丸底のもので、口縁部はおおむね内湾する。22は土師器の甕である。口縁部径が36cmを測るものである。23は粘土塊である。24～26は土師器の土錘である。27は須恵器の坏である。蓋の受けをもつタイプである。28は須恵器の坏蓋である。口縁部の内側に小さな段を有し、体外面には回転篋削りを施している。

1SD003出土遺物 (Fig.29)

弥生土器・土師器・須恵器等を出土した。29は、弥生土器片を再加工した面子ではないかと思われる。30は土師器の皿である。底部のみの資料で、底径6.2cmを測る。31・32は須恵器の坏である。33は須恵器の坏蓋の口縁部細片である。34は須恵器の甕の細片である。体部

外面に格子叩き、内面に同心円文叩きが認められる。35は煙管の吸い口である。

1SD007出土遺物 (Fig.30)

土師器・陶器・瓦器・青磁等を出土した。

36は土師器の大甕である。37は陶器の椀である。淡灰色の素地に白色の釉薬をかけるが、内底見込みは輪状に釉をかき取っている。38は陶器の鉢である。39は瓦器の茶釜で、口縁部径は12.2cmを測る。体部外面に波状文が施される。40は瓦器の火舎である。脚部の資料であるが、何足のタイプであるかはわからない。41・42は青磁の碗である。42は外反する口縁部をもつ。

1SD006出土遺物 (Fig.31)

青磁が出土した。43は青磁の碗の口縁部である。

1SD025出土遺物 (Fig.31)

土師器の土錘が出土した。44は土錘で、一部が欠損している。

2SD120出土遺物 (Fig.32)

土師器・須恵器・青磁・白磁等を出土した。45は土鍋である。口縁部を折り曲げて、玉縁状にするタイプである。46は須恵器の壺である。体部外面と外底面に回転篋削りを施している。48・49は青磁の碗である。47は底部の資料で、削り出し高台を有する。48は外反する口縁部の資料である。いずれも、黄緑色の釉薬を用いている。49は白磁の碗である。外反する口縁部の資料である。

2SD100出土遺物

須恵器・土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁・染付・硯・貨幣等を出土した。以下、溝内出土のものと同裏出土のものに分けて報告する。

溝内出土遺物 (Fig.33・Pl.16)

須恵器・土師器・瓦器・陶器・青磁・白磁・染付・硯・貨幣がある。

50は須恵器の鉢である。玉縁状の口縁部で、内面を中心に自然釉がかかる。

51は土師器の土鍋である。口縁部の外面を肥厚させるタイプである。52は土師質の製品であるが、用途不明品である。全体的に調整は丁寧である。53は土師器の土錘である。両端を欠損し、法量はわからない。

54は瓦器の火舎である。口縁部は内側にほぼ直角に折り曲げ、上面には1条の沈線がある。

55は陶器の椀である。ゆるやかに外反する口縁部をもつ。素地は精良で緑白色の釉薬がかかる。56は陶器の鉢で所謂播り鉢である。全面に施釉され、内面には摺目がある。57は陶器の蓋である。おそらくは小形の壺と組み合わせて使用したと考えられる。所謂梅干し壺の蓋であろう。

58~62は青磁の椀である。58~60は底部の資料であるが、いずれも削り出し高台をもつ。また、畳付と高台見込以外は施釉される。63・64は白磁の仏飯具である。63は上部の坏部分を欠くが、64はほぼ完形である。ともに、底部を除いて全面に施釉される。65~69は染付の碗である。いずれも白色の素地に呉須で施文される。65は高台見込に銘が認められる。66・67は内外面ともに施文されるが、65・68・69は外面にのみ施文され、内面は無文である。

70は石製の硯である。方形硯の右奥の部分である。海の部分と若干の陸が残存している。71は寛永通寶である。所謂「コ」寛永ではない。

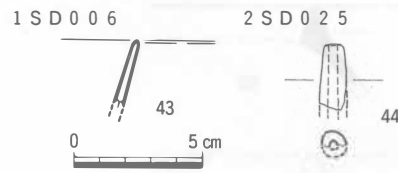


Fig.31 1SD006・2SD025
出土遺物実測図 (1/3)

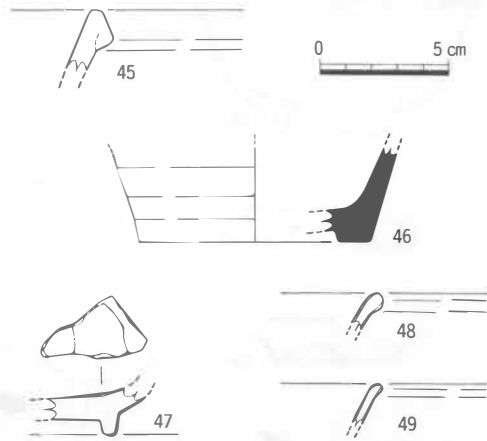


Fig.32 2SD120出土遺物実測図
(1/3)

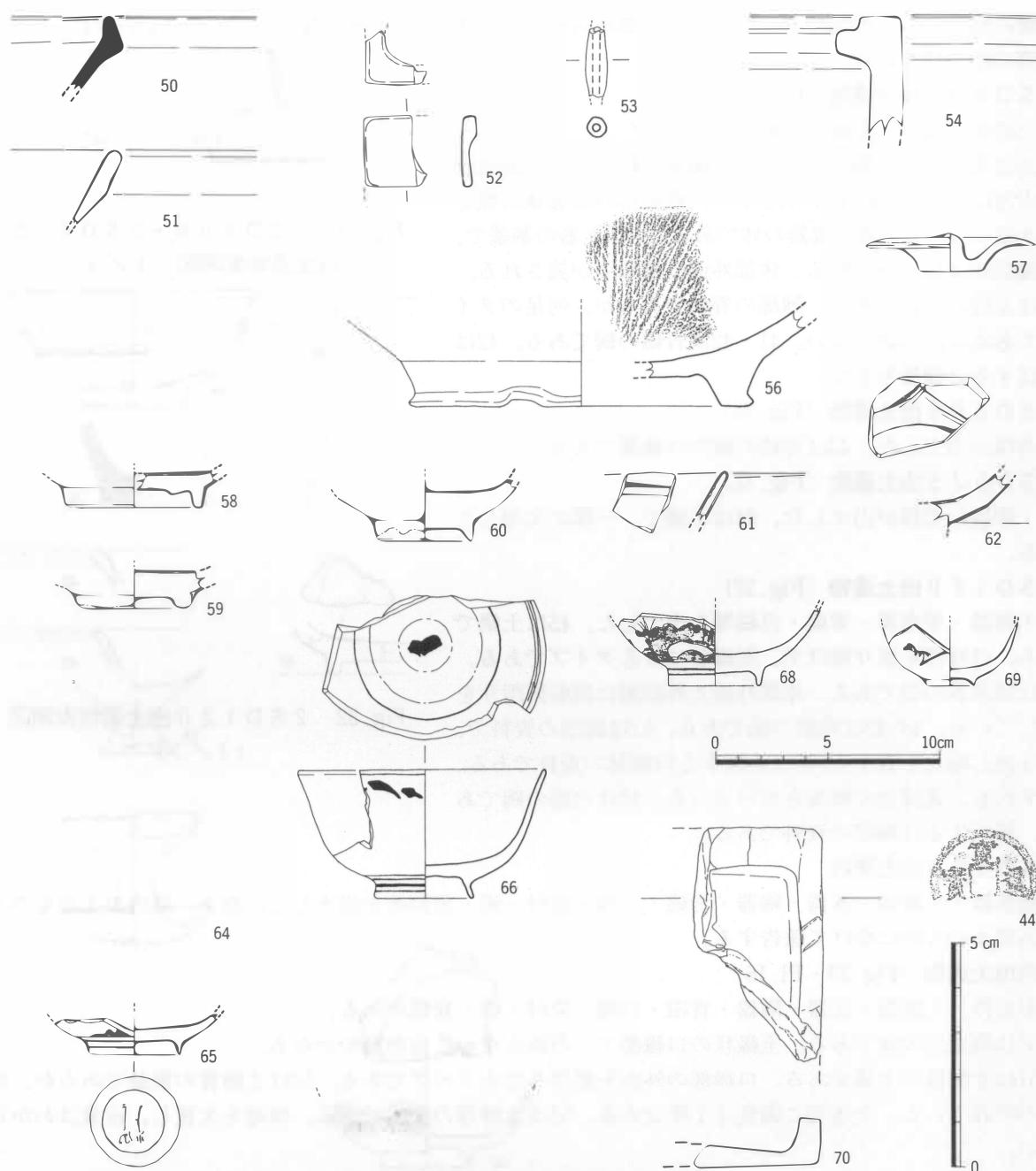


Fig.33 2SD100出土遺物実測図(1/3・2/3)

裏込内出土遺物 (Fig.34・Pl.18)

須恵器・土師器・陶器・染付が出土した。72は須恵器の壺である。2重口縁状となる口縁部の資料である。73・74は土師器の大甕で、口縁部を肥厚させるタイプである。75は土師器の盤である。内湾する口縁部の細片で、体部外面に波状文を施している。76・77は土師器の盤だと思われるが、瓦器である可能性もある。77は、体部最下位に斜位の十字文を連続して施している。

78は陶器の鉢である。所謂播り鉢で、底径は11.0cmを測る。79は陶器の碗である。内外面ともに細かい貫入が認められる。80は白磁の碗である。底部の資料で、高台径は4.1cmを測る。81は染付の皿である。畳付以外は全面に施釉されるが、内底見込の釉を輪状にかき取っている。82は染付の深皿である。内外面ともに施文され、畳付以外は全面に施釉される。

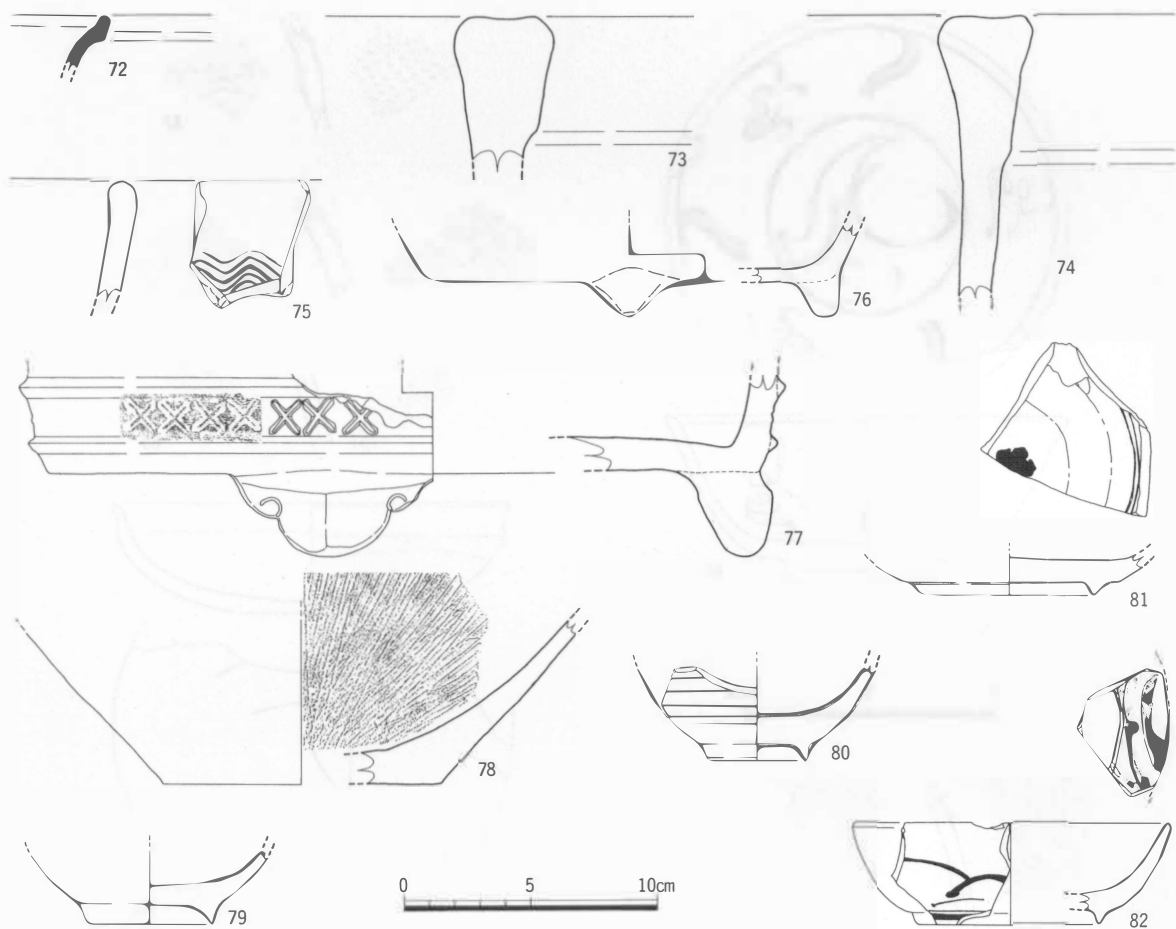


Fig. 34 2SD100裏込出土遺物実測図（1/3）

西調査区表土出土遺物

須恵器・土師器等を出土した。83は須恵器の壺である。外反する口縁部の細片で、体部外面には自然釉がかかる。口径13.0cmを測る。84は土師器の鉢で、きつく内湾する口縁部を特徴とする。85は土師器の土錘である。ほぼ完形である。

2SD201出土遺物 (Fig. 35・Pl. 19)

青磁・縄文土器等を出土した。86は青磁の碗で、ほぼ完形である。森田分類のI-4b類である。87~89は縄文土器の深鉢である。いずれも押型文土器の範疇に入る。87・88は横方向の楕円文を施すが、88は内面の施文を省略している。89は横方向の山形文を内外面ともに施している。

2SD219出土遺物 (Fig. 35・Pl. 19)

石鏃を出土した。99は黒曜石の打製石鏃で、完形品である。

2SK203出土遺物 (Fig. 35・Pl. 19)

土師器の坏を出土した。90は所謂丸底坏で、底部は手持ち篋削りで整形されている。体部は浅いボウル状、口縁部は小さく外反するもので、外底面には篋記号がある。

東調査区表土出土遺物 (Fig. 35・Pl. 19)

縄文土器・石器等を出土した。91~98は縄文土器の深鉢であると思われる。すべてが所謂押型文土器の範疇に入る。91は口縁部の資料で、口縁部内面には縦方向の条痕が施される。それ以外の部位には横

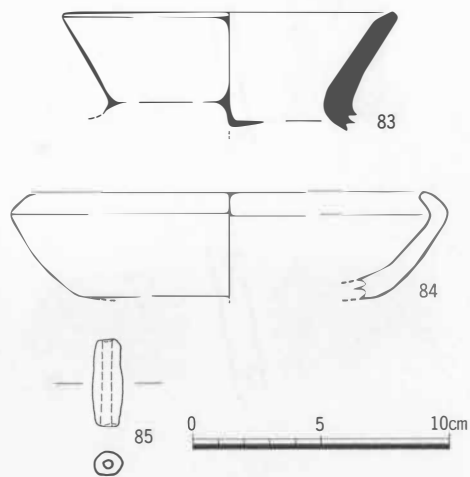


Fig. 35 西調査区表土出土遺物実測図（1/3）

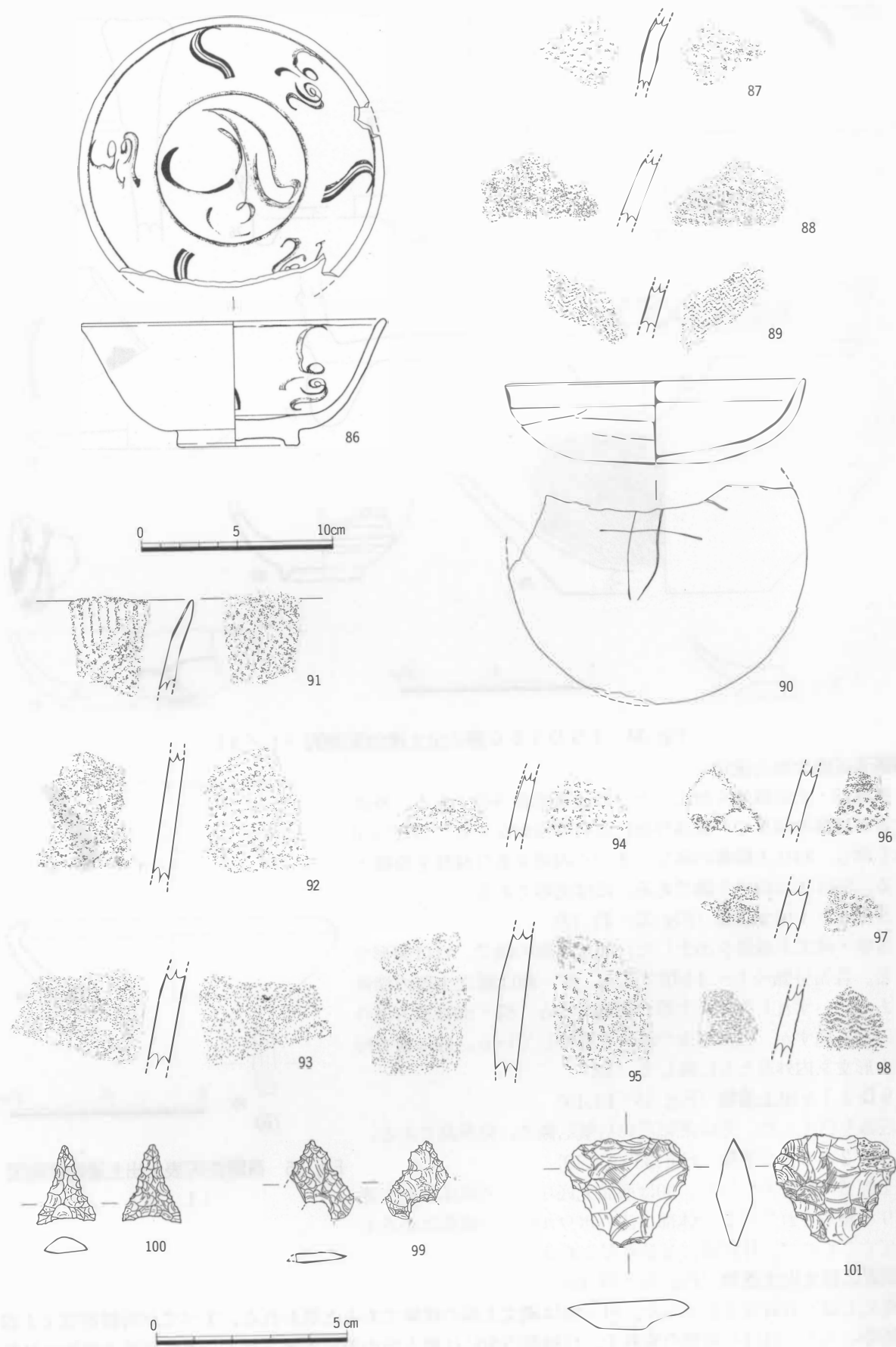


Fig.36 久恵岸ノ下遺跡（第2次調査）東調査区出土遺物実測図（1/3・2/3）

方向の楕円文が施文されている。92～97は楕円文の体部の細片である。おおむね外面だけ施文される傾向がある。98は、横方向の山形文を外面にのみ施した、体部の細片である。100は黒曜石の打製石鏃で、一方の脚の大半と、もう一方の脚の先端を欠損する。101は黒曜石の剥片2次加工品と思われるが確証はない。未製品の可能性もある。

No	遺構	番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部 形状	備考	R-No
1	1SD	001		土師	坏				口縁部 細片	不明	不明	不明			淡赤茶色	密	やや不良	わずかに 内湾		1
2	1SD	001		須恵	坏蓋				体部 細片		篋削り	ナテ			青灰色	精良	良好		体部外面に篋記号 有	4
3	1SD	001		須恵	坏蓋				体部 細片		不明	ナテ?			淡灰色	密	やや良			3
4	1SD	001		須恵	坏蓋				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ				青灰色	密	良好	下面に カエリ有		6
5	1SD	001		須恵	坏?		7.6		高台部 1/6				不明	不明	淡灰黄色	精良	やや良			2
6	1SD	001		須恵	碗?				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			暗灰色	密	良好	肥厚して 外反		5
7	2SD	005		須恵	甕				体部 細片		格子目 叩き	格子目 叩き			淡青灰色	密	良好			1
8	1SD	002		土師	坏		8.0		底部 1/8		不明	不明			淡茶色	密	良好			2
9	1SD	002		土師	ミ チュア				細片	ナテ	手づく ね	ナテ			淡茶色	密	良	内湾		1
10	1SD	002		須恵	坏				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			灰色	密	良好	外方に ひらく		3
11	1SD	002		須恵	坏	12.0	4.0	4.7	1/4	横ナテ	横ナテ	横ナテ	横ナテ	篋削り	青灰色	精良	良好	内傾して 外反	蓋の受けがある	4
12	1SD	002	III	須恵	坏				細片		不明	不明			乳灰黄色	密	不良		蓋の受けがある	7
13	1SD	002	III	須恵	坏				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			淡灰黄色	密	不良	外方に ひらく		6
14	1SD	002	III	須恵	坏	13.0			口縁部 1/6	横ナテ	横ナテ	横ナテ			青灰色	密	良好	外方に ひらく		5
15	2SD	010		弥生	甕	13.2			1/3	不明	不明	不明			淡赤茶色	砂粒含	やや不良	「く」の字 状		14
16	2SD	010		土師	坏	11.4	5.6	4.1	4/5	不明	不明	不明	不明	不明	淡茶褐色	微細砂粒 含	やや良	ゆるやかに 内湾		12
17	2SD	010		土師	坏	12.0			口縁部 1/4	不明	不明	ナテ			淡黄茶褐色	微細砂粒 含	やや良	内湾		5
18	2SD	010		土師	坏	12.6			口縁部 1/4	不明	不明	ナテ			淡黄茶色	微細砂粒 含	やや良	ゆるやかに 内湾		3
19	2SD	010		土師	坏	14.2			口縁部 1/6	不明	不明	不明			淡赤茶色	微細砂粒 含	やや良	ゆるやかに 内湾		2
20	2SD	010		土師	坏	14.8			口縁部 1/2	横ナテ	不明	ナテ			暗灰茶色	微細砂粒 含	良	内湾		4
21	2SD	010		土師	坏	17.0			1/4	不明	不明	不明			茶褐色	微細砂粒 含	やや良	ゆるやかに 内湾		13
22	2SD	010		弥生	甕	36.0			口縁部 1/4	不明	刷毛	不明			暗赤茶色	微細砂粒 含	不良	「く」の字 状		1
23	2SD	010		?	粘塊				完形						赤茶色	密	やや良			11
24	2SD	010		土師	土鉢	1.6		4.2	ほぼ 完形						淡灰茶色	砂粒含	やや良			10
25	2SD	010		土師	土鉢	1.6		4.3	完形						淡白茶色	細砂粒含	やや良			8
26	2SD	010		土師	土鉢	1.6		4.6	完形						淡黄茶色	細砂粒含	やや良			9
27	2SD	010		須恵	坏	12.4			口縁部 1/8	不明	不明	不明			乳黄色	良	不良	やや外反	蓋の受け有	7
28	2SD	010		須恵	坏蓋				口縁部 細片	横ナテ	回転 篋削り	横ナテ			青灰色	精良	良好	内側に段有		6
29	1SD	003		弥生	面子				4/5											1
30	1SD	003		土師	皿		6.2		底部 1/4		不明	不明	不明	糸切り	淡茶褐色	密	不良			2
31	1SD	003		須恵	坏				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			暗灰色	密	良	外方に ひらく		5
32	1SD	003		須恵	坏				底部 細片				横ナテ	横ナテ	青灰色	密	良好			3
33	1SD	003		須恵	坏蓋				口縁部 細片	不明	不明				淡茶色	密	不良	下部に 受け有		6

Tab.4 久恵岸ノ下遺跡出土遺物観察表①

久恵岸ノ下遺跡 (第1次調査・第2次調査)

No	遺構	番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部 形状	備考	R-No
34	ISD	003		須恵	甕				体部 細片		格子 叩き	同心円 叩き			外：青灰色 内：淡灰色	精良	良好			4
35	ISD	003		鉄	煙管				吸口 のみ											7
36	ISD	007		土師	大甕				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			灰白色	砂粒多	良	肥厚して 直立		6
37	ISD	007		陶器	椀	4.2			底部 1/2		施釉	施釉	施釉	横ナテ 露胎	素地：淡灰色 釉薬：白色	精良	良好		内底見込みの釉を 輪状に掻き取る	2
38	ISD	007		陶器	鉢				底部 1/4		施釉	横ナテ	横ナテ	施釉	紫褐色	密				1
39	ISD	007		瓦器	茶釜	12.2			口縁部 1/6	横ナテ	横ナテ 波状文	ナテ 横ナテ			黒灰色	砂粒・赤 色粒子含	良	短く直立		4
40	ISD	007		瓦器	火舎				脚部 細片				横ナテ	横ナテ	淡黒灰色	砂粒含	良			5
41	ISD	007		青磁	碗		5.0		底部 1/4		施釉	施釉	施釉	横ナテ 露胎	素地：淡灰色 釉薬：緑褐色	精良	良好			3
42	ISD	007		青磁	碗				口縁部 細片	施釉	施釉	施釉			素地：灰色 釉薬：青緑色	精良	良好	外反		7
43	ISK	006		青磁	碗				口縁部 細片	施釉	施釉	施釉			素地：淡灰色 釉薬：淡緑色	精良	良好	外方に ひろく		1
44	2SD	025		土師	土鉢	1.0			一部 欠損						明茶色	良	良			1
45	2SD	120		土師	土鍋				口縁部 細片	ナテ	ナテ	ナテ			明茶色	微細砂粒 含	やや不良	玉縁状		5
46	2SD	120		須恵	壺	9.0			底部 1/4		回転 篋削り	横ナテ	横ナテ	回転 篋削り	淡黄灰色	砂粒含	やや良		内底見込みに釉のか きとりがみられる	1
47	2SD	120		青磁	碗				底部 細片		施釉	施釉	施釉	篋削り	素地：淡紫灰色 釉薬：黄緑色	細砂粒含	良			2
48	2SD	120		青磁	碗				口縁部 細片	施釉	施釉	施釉			素地：淡紫灰色 釉薬：黄緑色	微細砂粒 含	良	外反		3
49	2SD	120		白磁	碗				口縁部 細片	施釉	施釉	施釉			素地：黄白色 釉薬：黄白色	細砂粒含	良	外反		4
50	2SD	100		須恵	鉢				口縁部 細片	横ナテ					灰色	砂粒含	良	玉縁状	口縁部から内面に かけて自然釉あり	1
51	2SD	100		土師	土鍋				口縁部 細片	横ナテ	横ナテ	横ナテ			暗褐色	砂粒含	良好	外面に肥厚		2
52	2SD	100		土師?	?				?						淡黄茶色	精良	良			19
53	2SD	100		土師	土鉢	9.0			両端 欠損						淡黄灰色	精良	やや良			20
54	2SD	100		瓦器	火舎				口縁部 細片						暗灰色	砂粒含	良好	内側に 折り曲げ ゆるやかに 外反	上面に沈線1条有	3
55	2SD	100		陶器	椀	11.2	4.8	5.3	1/6	施釉	施釉	施釉	施釉	露胎	素地：黄茶色 釉薬：緑白色	精良	良好			17
56	2SD	100		陶器	鉢		15.4		底部 1/6			摺り目 施釉	施釉		素地：赤茶色 釉薬：紫茶色	精良	良			18
57	2SD	100		陶器	蓋	7.6	3.0	1.7	ほぼ 完形	施釉	施釉	横ナテ	施釉	糸切	素地：黄土色 釉薬：淡黄色	微細砂粒 含	良好	外反		16
58	2SD	100		青磁	碗			6.2	底部 1/4		施釉	施釉	施釉	露胎	素地：淡灰白色 釉薬：淡緑色	精良	良好			7
59	2SD	100		青磁	碗			7.2	底部 1/3		施釉	施釉	施釉	露胎	素地：灰白色 釉薬：暗緑色	精良	良好			8
60	2SD	100		青磁	碗			4.4	底部 のみ		施釉	施釉	施釉	横ナテ	素地：淡灰白色 釉薬：灰緑色	精良	良好			6
61	2SD	100		青磁	碗				口縁部 細片	施釉	施釉	施釉			素地：淡灰色 釉薬：青緑色	精良	良好	外方に開く	内面に片切り彫有	10
62	2SD	100		青磁	碗				底部 細片			施釉	施釉		素地：灰白色 釉薬：暗緑色	精良	良好		内面に片切り彫有	9
63	2SD	100		白磁	仏具			3.2	3/4		施釉	施釉	施釉	横ナテ	青白色	精良	良好			5
64	2SD	100		白磁	仏具	6.2	2.5	5.8	ほぼ 完形	施釉	施釉	施釉	施釉	糸切	乳白色	精良	良	ゆるやかに 内湾		4
65	2SD	100		染付	碗		4.0		底部 のみ		施釉	施釉	施釉	施釉	白色	精良	良好		底部に銘有り	11
66	2SD	100		染付	碗	11.1	4.5	5.8	3/5	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	淡灰白色	精良	良好	ゆるやかに 外反	内底見込の釉を輪 状にかき取る	15
67	2SD	100		染付	碗		4.1		底部 1/4		施釉	施釉	施釉	施釉	白色	精良	良好			14
68	2SD	100		染付	碗		4.2		底部 のみ		施釉	施釉	施釉	施釉	白色	精良	良好			13
69	2SD	100		染付	碗		2.1		1/3		施釉	施釉	施釉	施釉	白色	精良	良好			12
70	2SD	100			硯				細片											21

Tab.5 久恵岸ノ下遺跡出土遺物観察表②

Na	遺構	番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部 形状	備考	R-Na
71	2SD	100		貨幣	寛水				完形											22
72	2SD	100	裏込	須恵	壺				口縁部 細片	横ナテ					青灰色	精良	良好	疑2重口縁		23
73	2SD	100	裏込	土師	甕				口縁部 細片	横ナテ					淡黄茶色	砂粒含	良	肥厚		24
74	2SD	100	裏込	土師	甕				口縁部 細片	横ナテ	不明	ナテ			淡灰黒色	砂粒含	良	肥厚		25
75	2SD	100	裏込	土師	盤				口縁部 細片	横ナテ	波状文	横ナテ			明茶褐色	細砂粒含	良好	内湾		26
76	2SD	100	裏込	土師?	火舎		16.6		底部 1/4		ナテ	ナテ	ナテ	ナテ	黄茶色	砂粒含	やや良			33
77	2SD	100	裏込	土師?	火舎		28.6		底部 1/4		横ナテ	横ナテ	ナテ	ナテ	暗黄色	細砂粒含	良		側面に斜位十字文 のスタンプ有	32
78	2SD	100	裏込	陶器	鉢		11.0		1/2		横ナテ	摺り目	摺り目	糸切	紫茶色	精良	良好			31
79	2SD	100	裏込	陶器	椀		5.0		底部 1/2		施釉	施釉	施釉	施釉	素地：淡黄茶色 釉薬：白茶色	精良	良好		内外面に細かい貫 入有	30
80	2SD	100	裏込	白磁	碗		4.1		底部 1/2		施釉	施釉	施釉	施釉	素地：淡黄白色 釉薬：淡緑色	精良	良好			27
81	2SD	100	裏込	染付	皿		6.8		底部 1/4		施釉	施釉	施釉	施釉	素地： 淡灰白色	微細砂粒 含	良			28
82	2SD	100	裏込	染付	深皿	12.6	7.4	4.0	1/8		施釉	施釉	施釉	施釉	白色	精良	良好	ゆるやかに 内湾		29
83	1A	表土		須恵	壺	13.0			口縁部 1/6	横ナテ	横ナテ	自然釉			暗灰色	細砂粒含	良	外反		1
84	1A	表土		土師	鉢	17.0			口縁部 1/8	不明	不明	不明			淡茶色	微砂粒含	やや良	きつく内湾		1
85	1A	表土		土師	土鉢				ほぼ 完形						淡茶色	微砂粒含	やや良		長さ3.3cm 径1.1cm	2
86	2SD	201		青磁	碗	16.0	6.3	6.5	ほぼ 完形	施釉	施釉	施釉	施釉	露胎	素地：灰色 釉薬：暗青緑色	精良	良好	外反	竜泉系	1
87	2SD	201		縄文	深鉢				体部 細片	楕円文 横方向	楕円文 横方向				黒茶色	砂粒含	良		内面は条痕有	2
88	2SD	201		縄文	深鉢				体部 細片	楕円文 横方向	ナテ				黒茶色	砂粒含	良			3
89	2SD	201		縄文	深鉢				体部 細片	山形文 横方向	山形文 横方向				黒茶色	砂粒含	良			4
90	2SK	203		土師	坏	15.8		4.4	1/2	横ナテ	手持ち 篋削り	横ナテ	横ナテ	手持ち 篋削り	淡赤褐色	密	ほぼ良	小さく外反	底部外面に篋記号 有	5
91	2C	表土		縄文	深鉢				口縁部 細片	条痕 ナテ	楕円文 横方向	楕円文 横方向			黒茶色	砂粒含	良			8
92	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文									11
93	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文				黒茶色	砂粒含	良			10
94	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文									12
95	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文 横方向	楕円文 横方向			黒茶色	砂粒含	良			9
96	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文									14
97	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		楕円文									13
98	2C	表土		縄文	深鉢				体部 細片		山形文 横方向									15
99	2C	表土		黒曜石	石鏃				2/3						黒色					16
100	2SD	219		黒曜石	石鏃				完形						灰色				姫島産か?	6
101	2C	表土		黒曜石	?				?						黒色				2次加工品	17

Tab.6 久恵岸ノ下遺跡出土遺物観察表③

(4) 小結

今回の調査では、調査区を都合2ヶ年度に分けて調査することになった。そのため、同一と思われる溝が双方の調査区で確認されたが、その間に現況の道路が残ったりして、2本の溝を確実に同一と断定するだけの資料は得られなかった。

しかし、石垣遺構の調査では、水汲み場らしき遺構も確認され、この地域の歴史の一部が日の目を見たのではないかと考えている。以下、項目別に若干の考察を加えて、小結としたい。

石垣遺構

調査区の南で確認された、2SD100がこれにあたる。当初は、現況の水路敷と完全に重複していたため、農業用水路の護岸設備ではないかと考えていた。時期も現代の所産の可能性が強いと予想した。しかし、調査を進めるにつれ、水路の護岸にしては構造がしっかりしており、裏込も丁寧に詰められている状況が確認された。加えて、東側で屈曲して以降には石垣がなく、水路護岸としては不自然な点に気になり始めた。さらに東側で、溝の底面に石敷の施設が確認された。以上のことを総合的に判断すると、今回確認した石垣と石敷は、屋敷地の護岸によく似ていることがわかった。水路の屈曲から先に石垣がないのは、屋敷地がそこまで広がっていないからだと考えれば解りやすい。石敷き遺構については、水路にもあって良いと思うが、屋敷地に付属するものと考えた方が理解しやすい。

いずれにしても、現段階でこの遺構の性格を断定することはできない。南側の地域の調査を行っていないが、屋敷地の護岸であれば、南側に建物が展開するはずである。今後の調査の進展を見守りたい。

溝状遺構

複数の溝を確認した。1SD001・2SD005と1SD002・1SD010は、いずれも歴史時代に下る土器が出土していない。したがって古墳時代の所産と考えたい。それ以外のものからは中近世の遺物が出土しており、中近世の農業用水路と捉えてよからう。

縄文土器

今回の調査では東調査区を中心に、押型文土器が出土している。大半は表土からの出土である。今回出土したものは、一部山形文があるほかは大半が楕円文となっている。全体を概観すれば、早水台式を中心にした時期が与えられる。とくに92は口縁部の資料で、この地域の土器の形態をよくあらわしている。今回、当該期の遺構は確認できなかったが、周辺に集落が展開するのはほぼ間違いがなく、調査の進展が待たれる。

IV. まとめ

ここでは、筑後東部地区遺跡群のうち、今回報告するエリアを中心に多少の考察を加えたい。今■報告する遺跡は、久恵集落と新溝集落を結ぶ道路と、九州自動車道との間に挟まれた地域に点在している。さらに未報告ではあるが、久恵中野遺跡・久恵東岸遺跡・久恵上川原遺跡・久恵権藤遺跡が調査事例として知られている。個々の遺跡の詳細については割愛するが、全体としては縄文時代早期から近世・近代に到る多種多様な遺構が確認されている。ここでは、いくつかの時代について、景観復元的なものも含めて考えてみたい。なお、各遺跡の位置関係はFig.1を参照されたい。

まず、縄文時代早期であるが、久恵中野遺跡では石組みの炉が確認されている。また、本書で報告した久恵岸ノ下遺跡をはじめ久恵権藤遺跡でも押型文土器が出土している。押型文土器は早水台式を中心にした時期が与えられ、この付近にあった集落の時期を考える上での指標となろう。また、久恵内次郎遺跡（第2次調査）では時期は不明ながら落し穴も確認されており、この付近に当該期の集落があって周辺では狩猟採集活動が行われていた可能性を提示できる。具体的には、久恵中野遺跡から久恵岸ノ下遺跡を中心とするあたりに集落が形成され、北側の水場付近で落し穴による狩猟活動を行っていたのではなかろうか。

次に弥生時代であるが、この時期の集落については判然としない。ただ、久恵内次郎遺跡（第2次調査）では弥生時代のもと考えられる落し穴が確認されている。この落し穴は底面に杭痕が認められないことから、猪の子供（所謂ウリ坊）を捕らえて一時飼育し、祭祀等に供したとも考えられる。いずれにしても興味深い事例である。

古墳時代から古代にかけては今回の報告に含まれないため割愛するが、中世に入ると荘園支配の潮流にこの付近も飲み込まれていくようである。久恵川ノ上遺跡では鹿付きの建物が確認され、上妻荘・水田荘との関係が注目される。相対する荘園の境界近くに位置するため、出域的な意味あいで館が設けられたのではないだろうか。

近世には久恵岸ノ下遺跡で報告した石垣遺構が注目される。水汲み場が附設されていることからしても、南側には屋敷地があったと考えるべきであろう。記録等には残っていないが、久恵集落の有力者の居宅等の可能性がある。

以上、現段階での概観を行ったが、本章の冒頭にも断わったとおり未報告の遺跡がまだ存在する。したがって、それらの遺跡の本報告完了後にあらためて考察する必要がある。

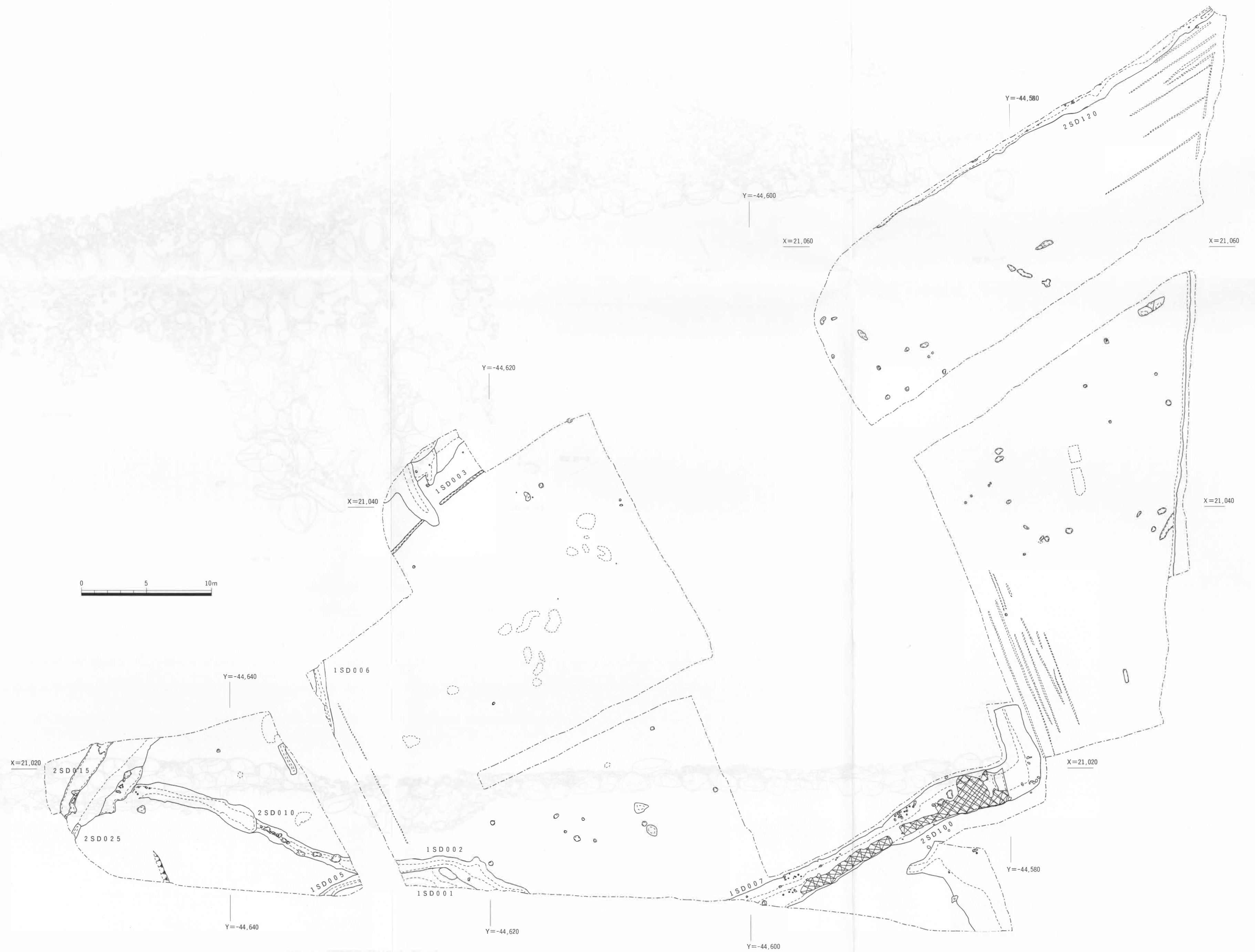


Fig. 37 久恵岸ノ下遺跡西調査区遺構配置図（1/200）

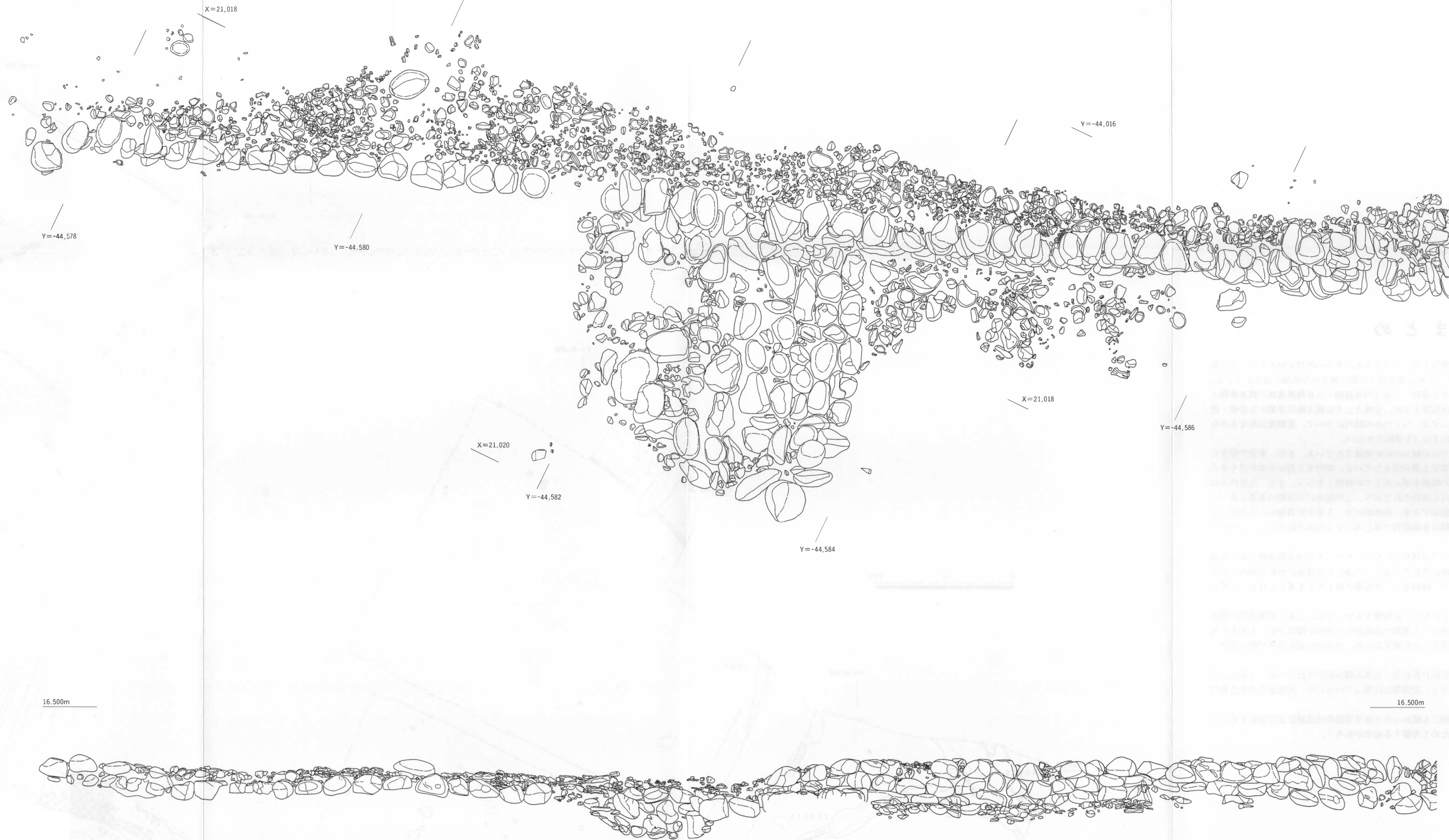


Fig.38 2SD100石垣実測図 (1/20)

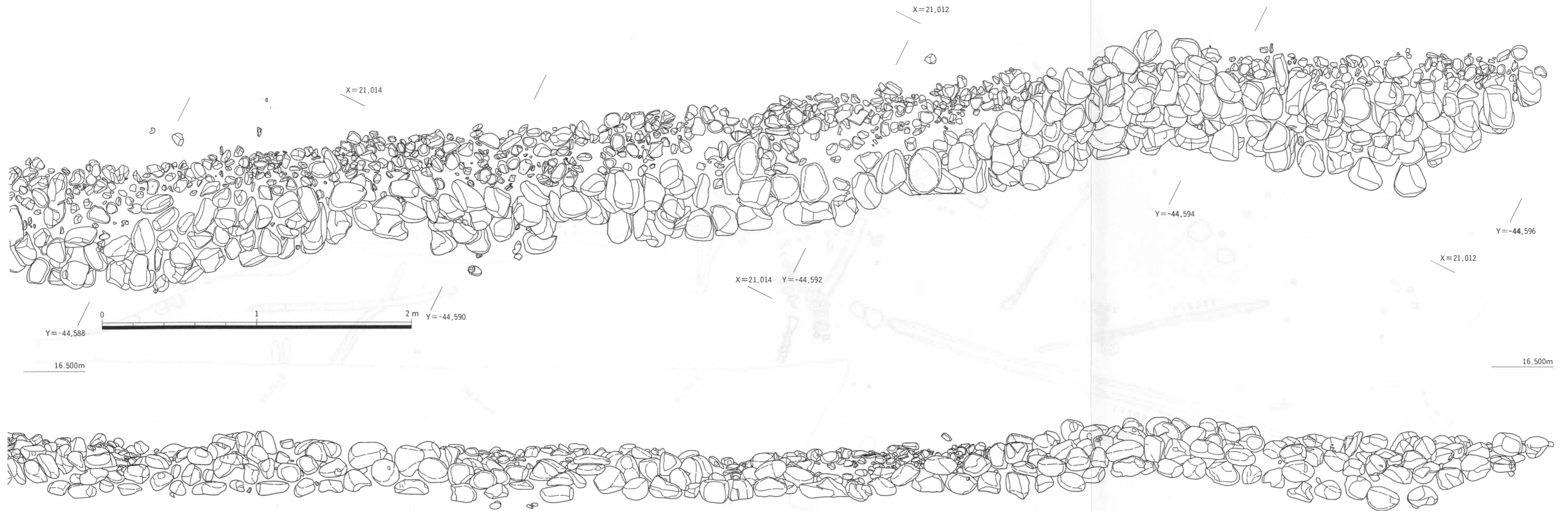


Fig. 38 2SD100石垣実測図 (1/20)

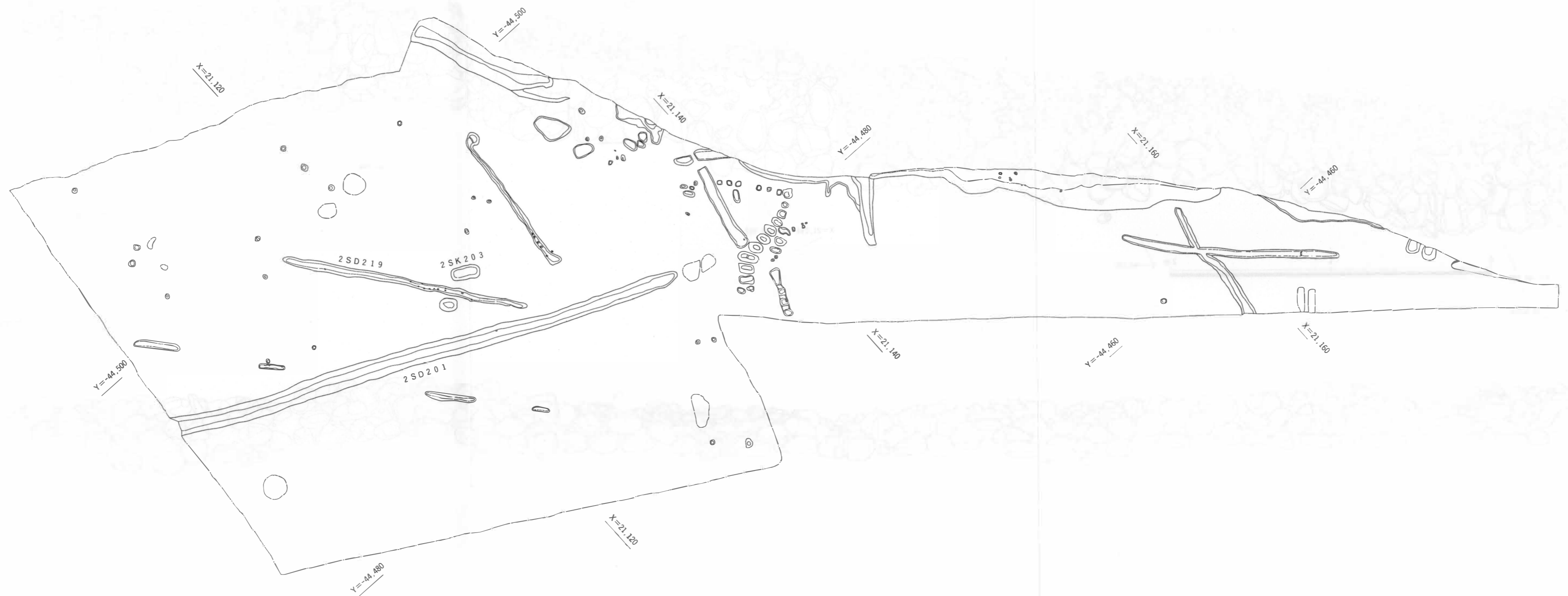
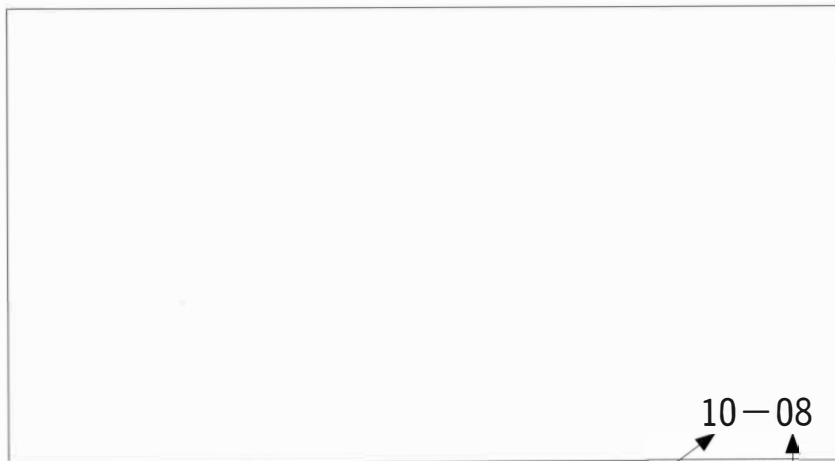


Fig.39 久恵岸ノ下遺跡東調査区遺構配置図 (1/200)

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は以下のとおりである。



10-08

Fig. 番号

遺物番号



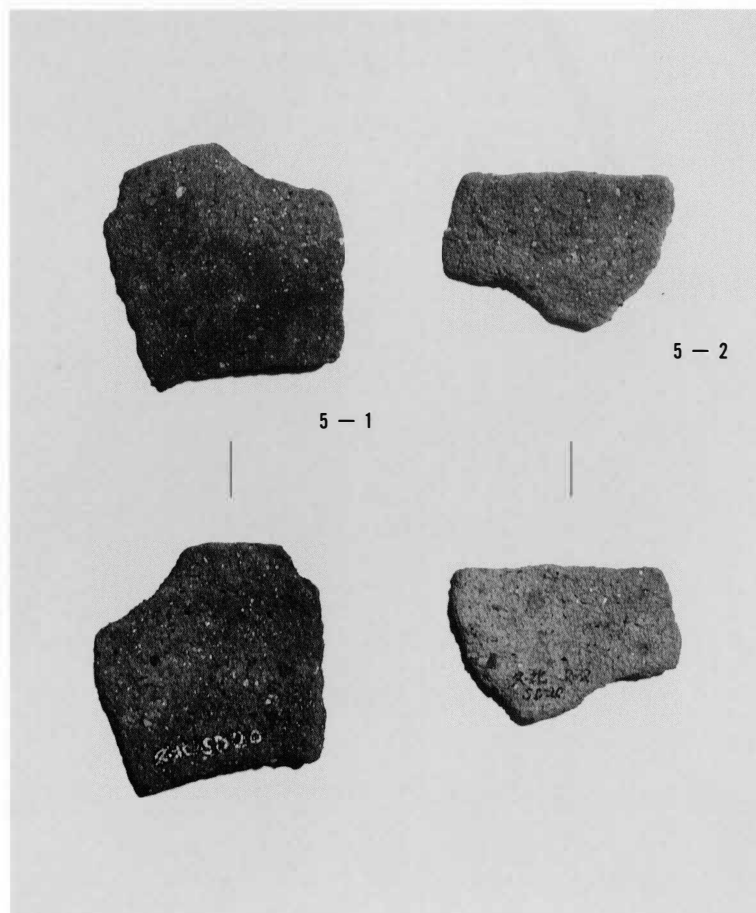
調査区全景①（東から）



調査区全景②（南から）



調査区全景③（南から）





調査区全景（南から）



SK1（北から）

Pl.4



西側調査区全景（西から）



東側調査区全景（南から）

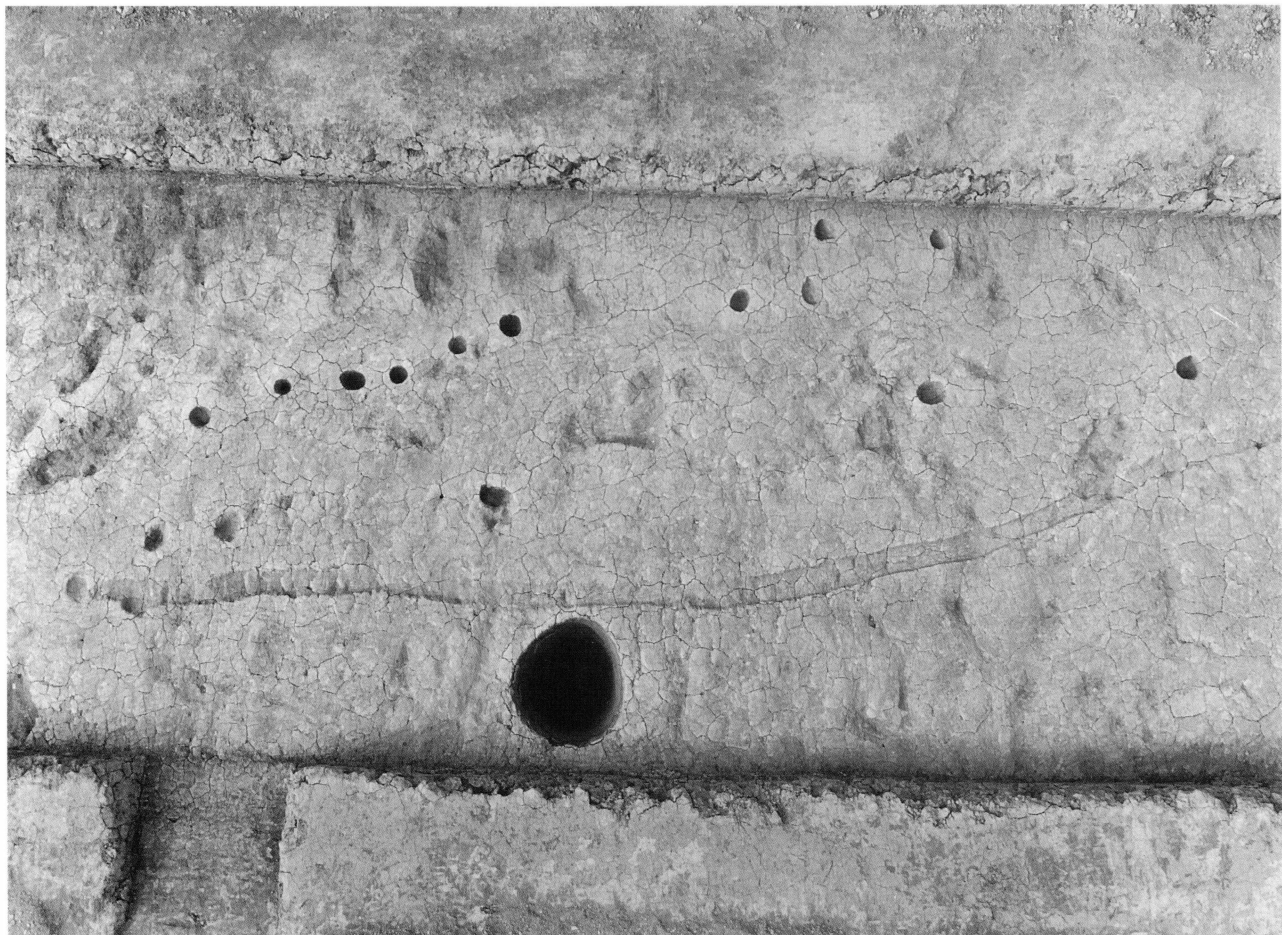


調査区全景 (西から)

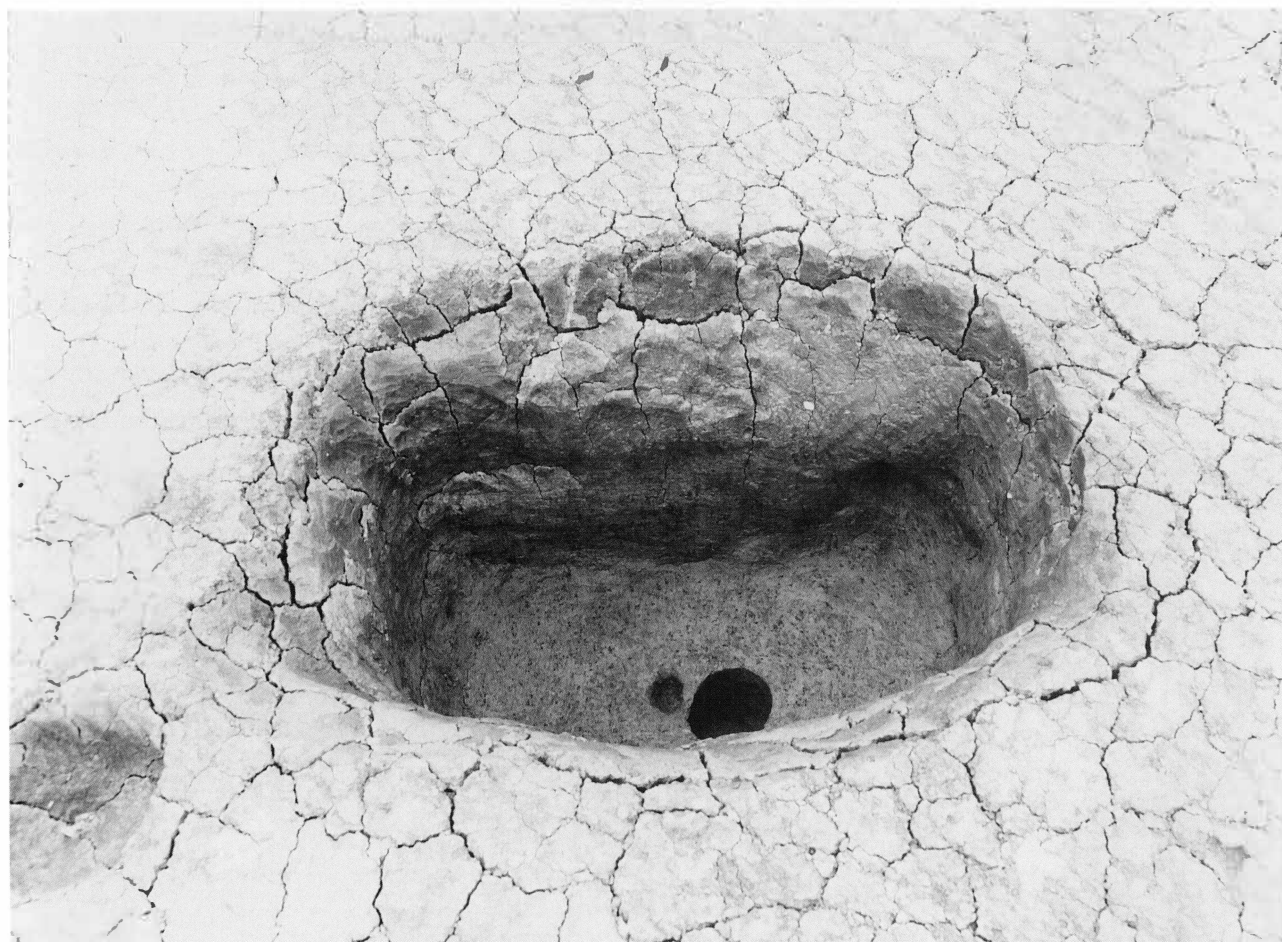


落とし穴群 (上が北)

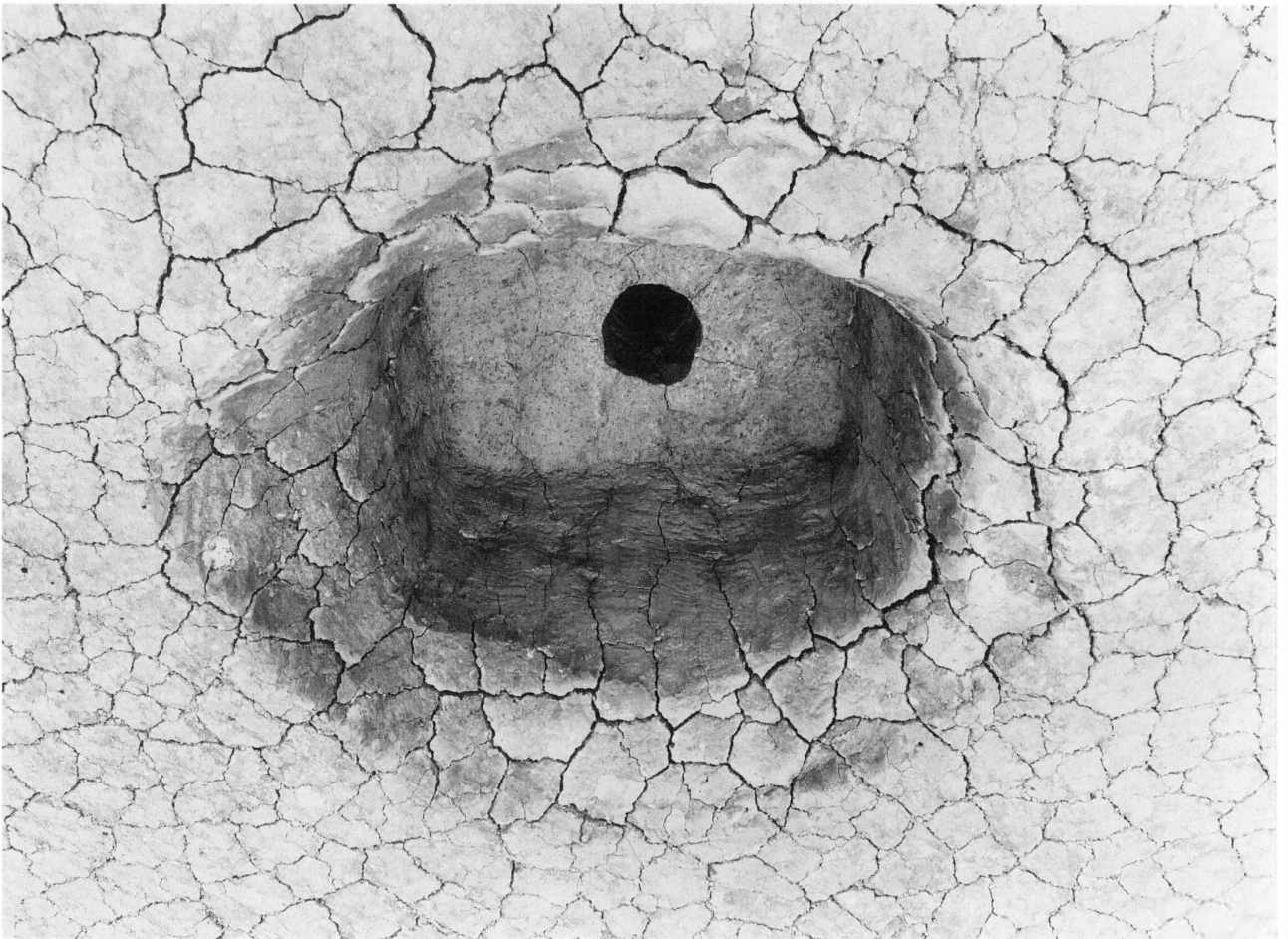
Pl. 6



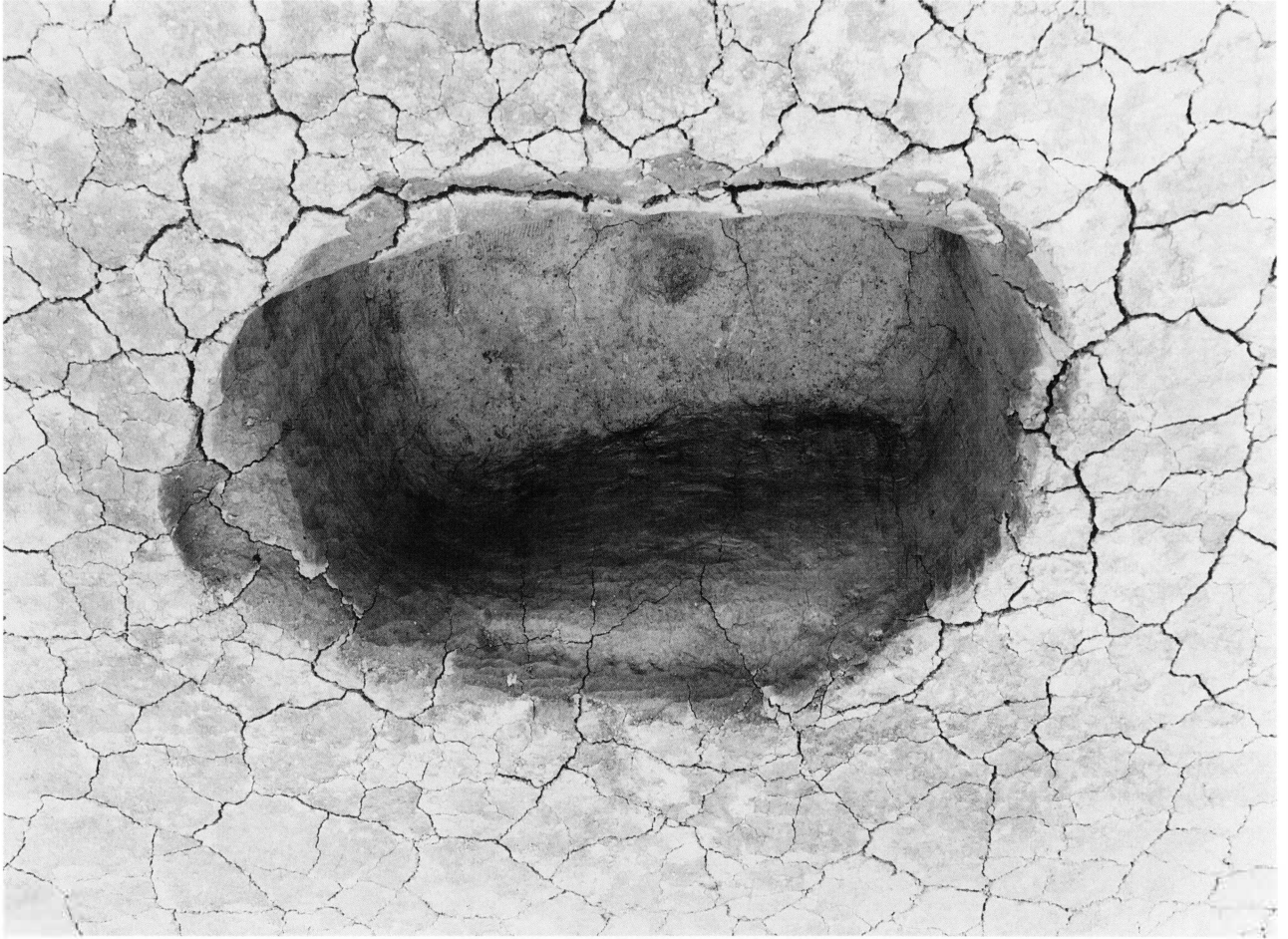
2SK40 附近空中写真（上が北）



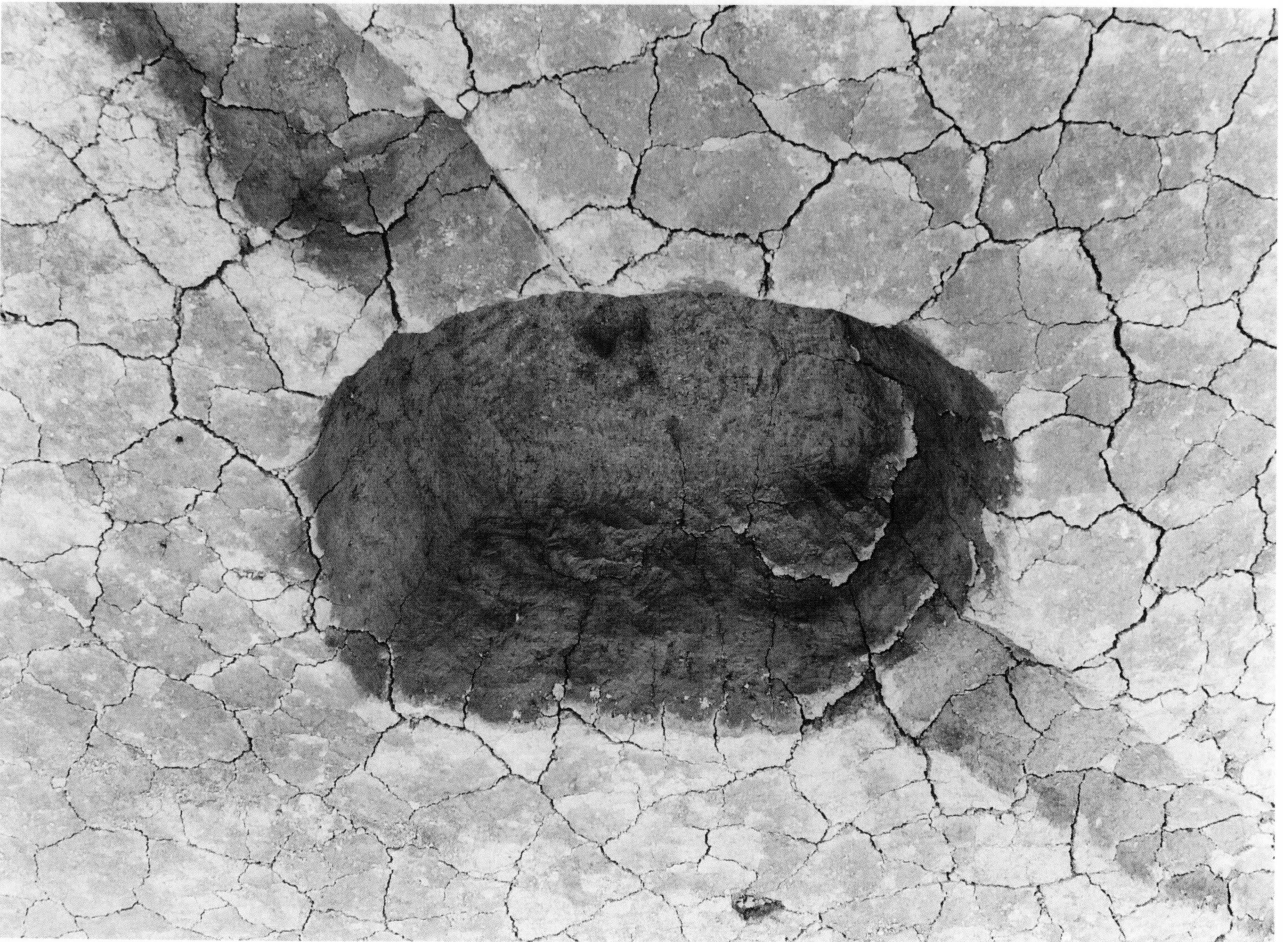
2SK10 完掘状況（西から）



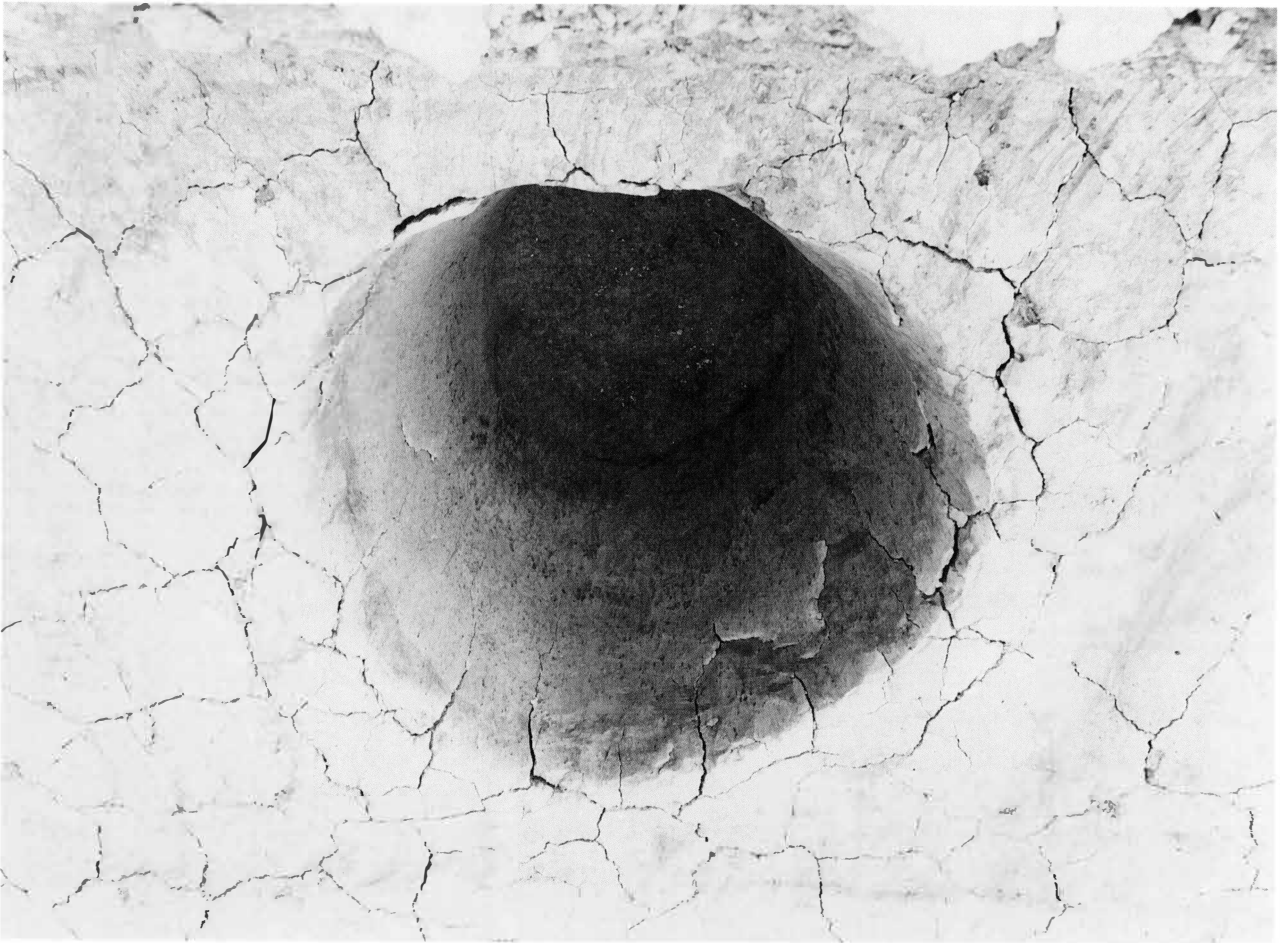
2SK15 完掘状況 (西から)



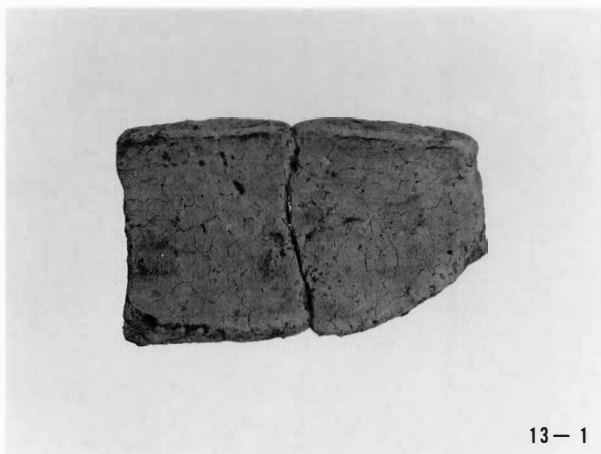
2SK20 完掘状況 (西から)



2SK25 完掘状況 (西から)

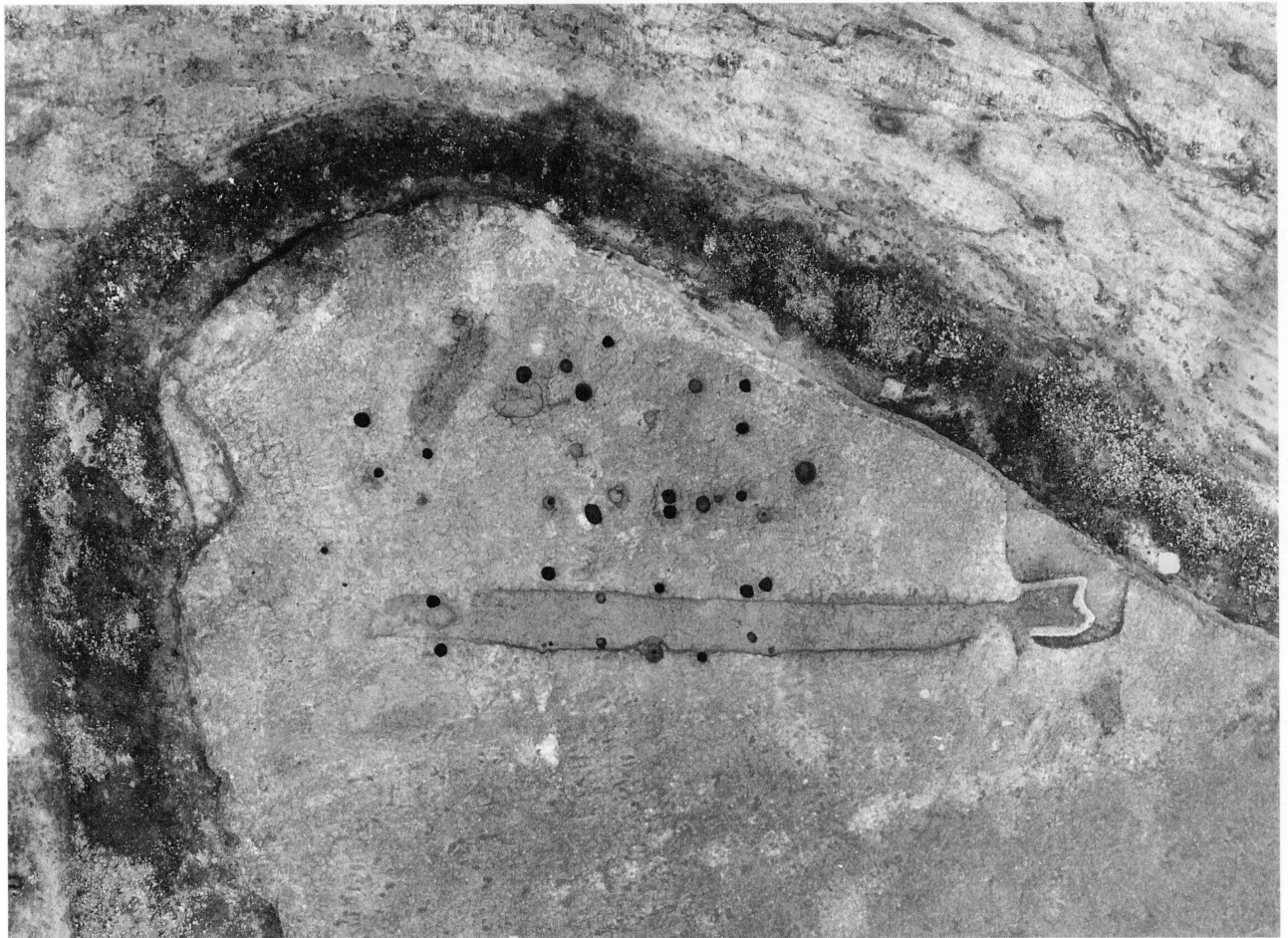


2SK40 完掘状況 (南から)

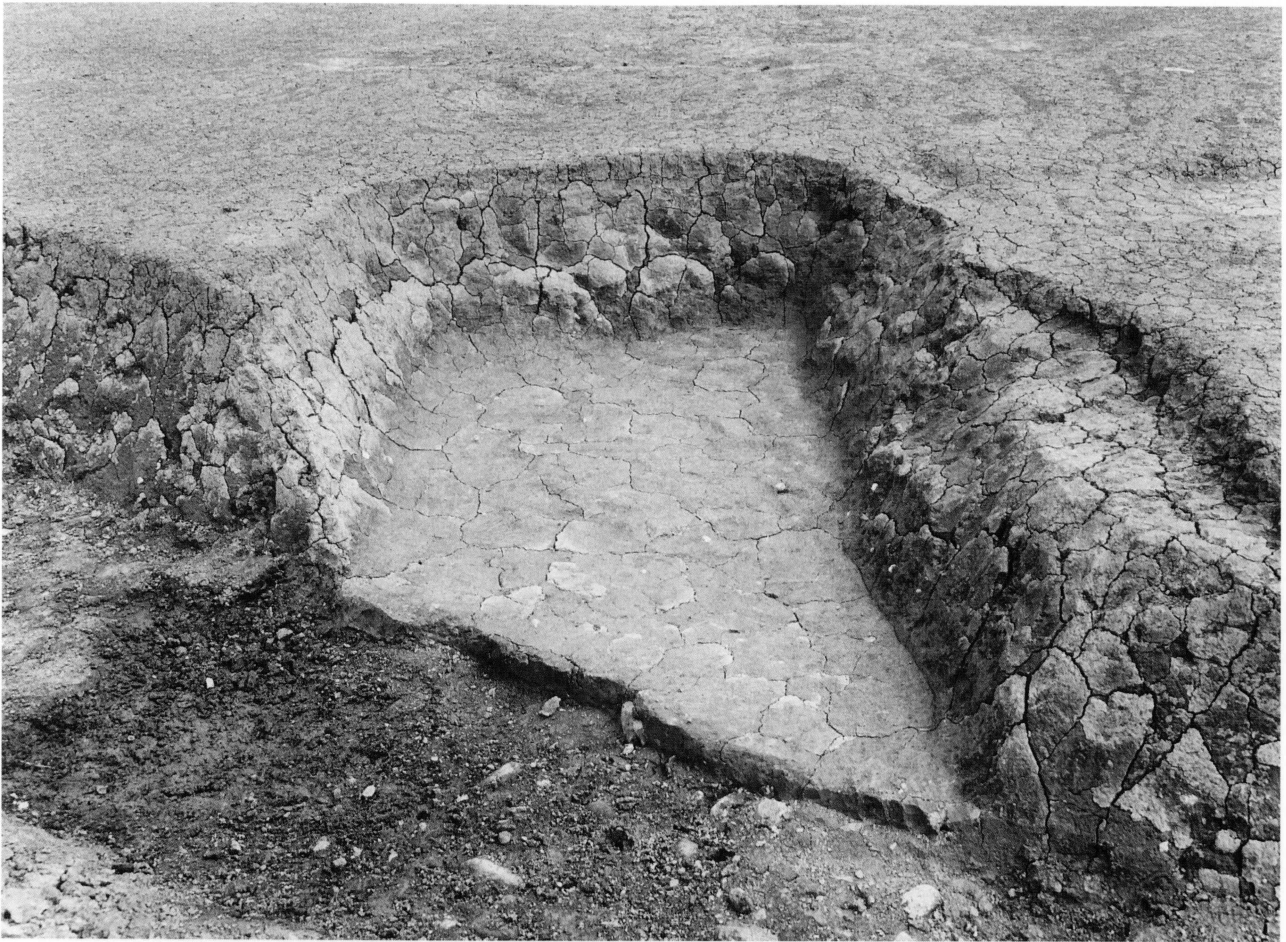




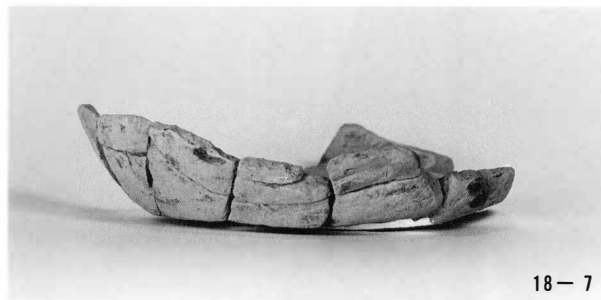
調査区全景 (上が西)



1SB15・1SB20 完掘 (上が西)



1SK10 完掘（西から）

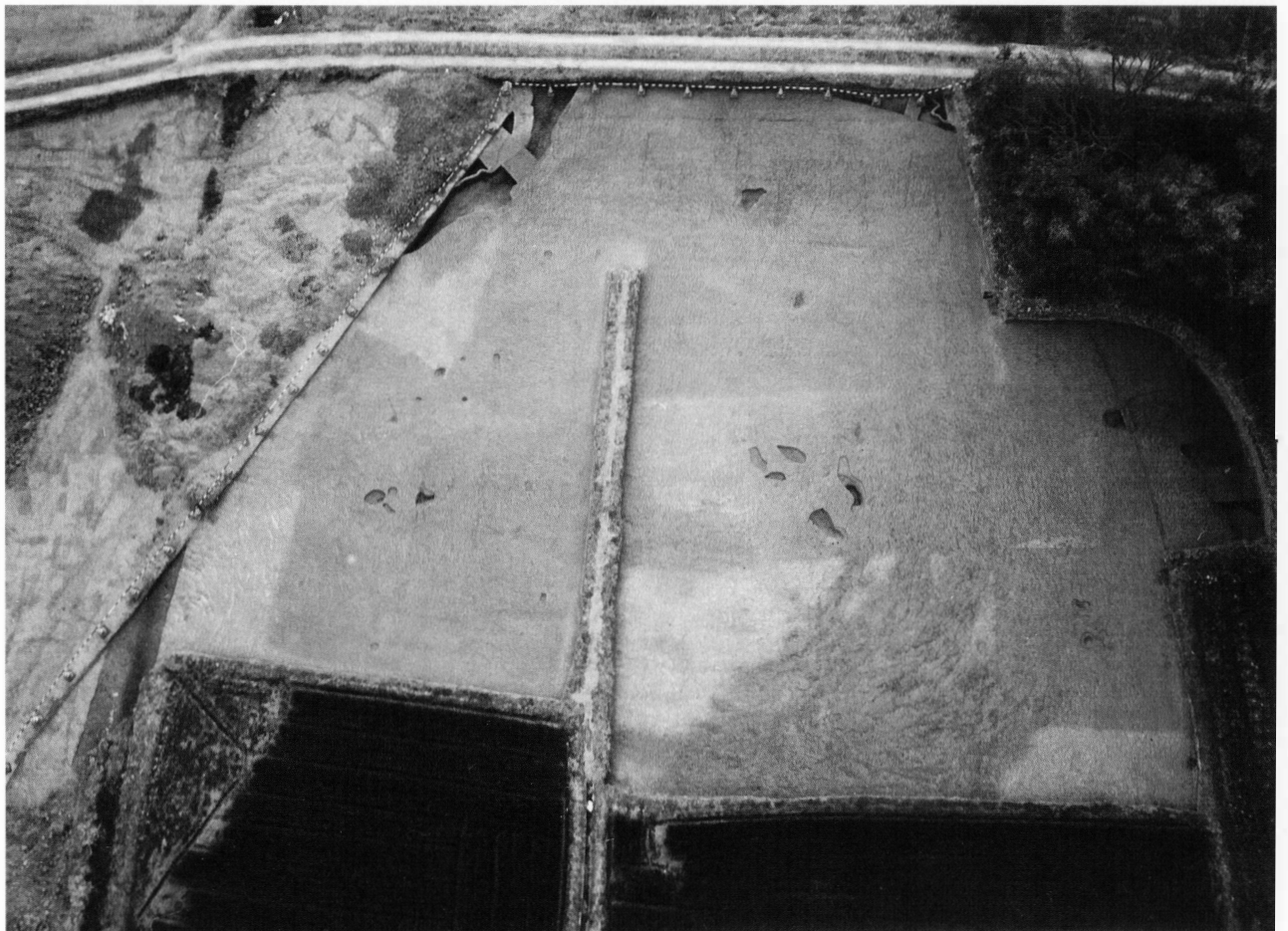


18-7

久恵川ノ上遺跡出土遺物



第1次調査 調査区全景（南から）



第1次調査 A調査区全景（上が西）



第1次調査 B調査区全景（上が東）



第2次調査 C調査区全景（上が西）

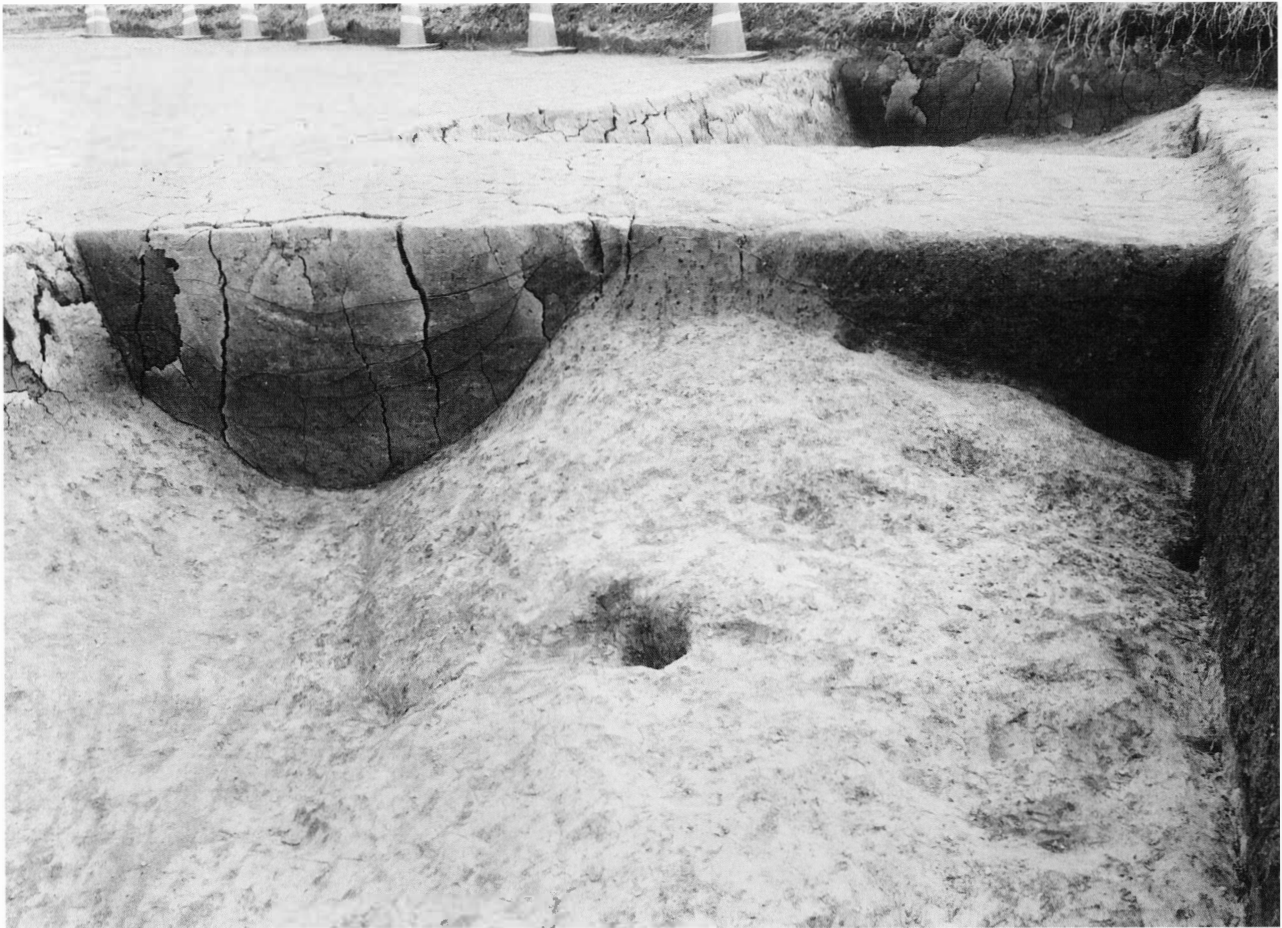
Pl.14



1SD007 (2SD100) 石垣 (西から)



2SD100 石垣断面 (上が西)

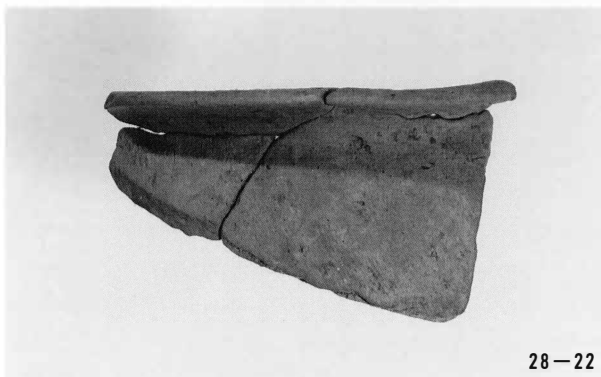
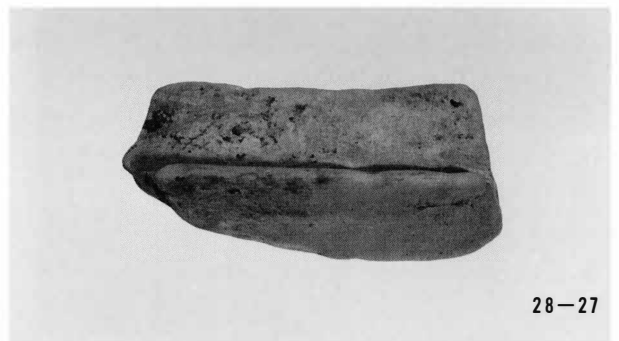
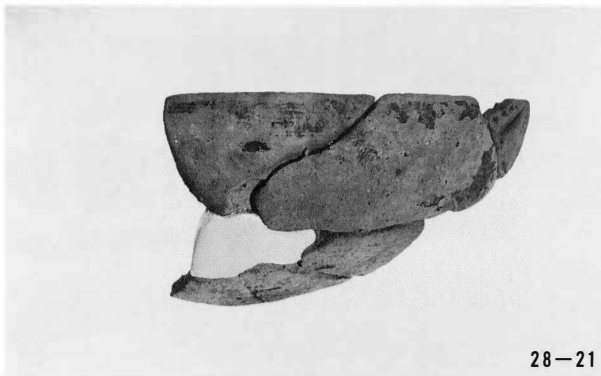
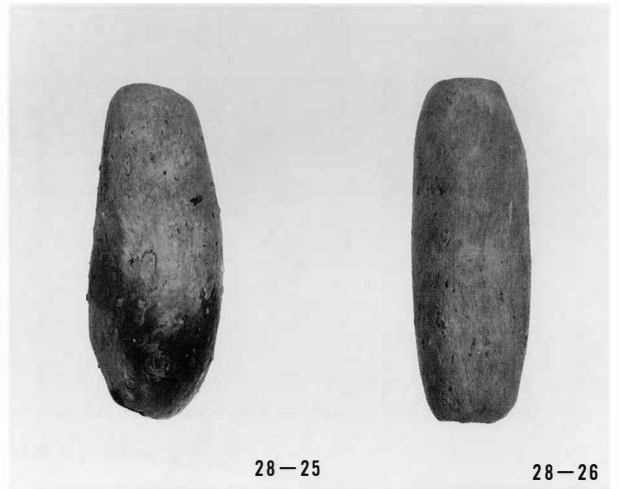
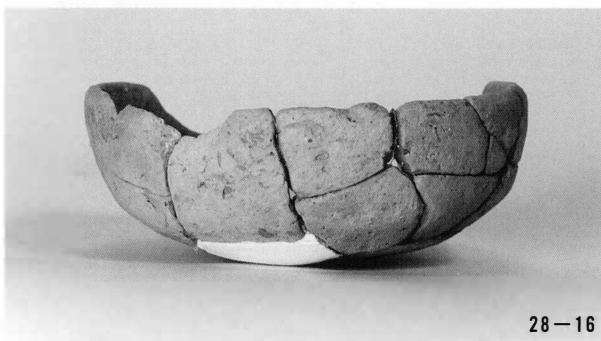
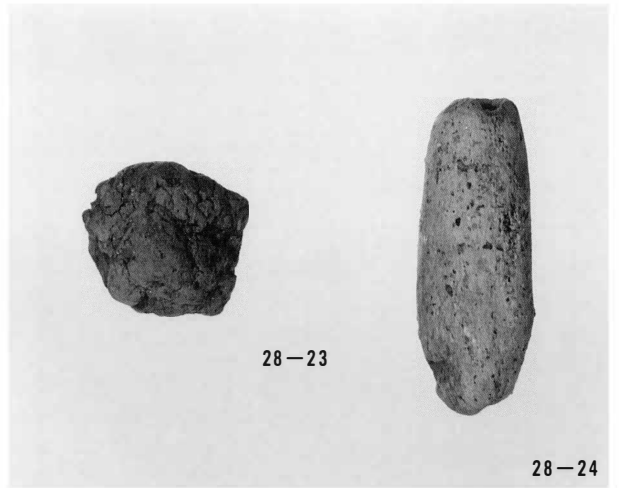
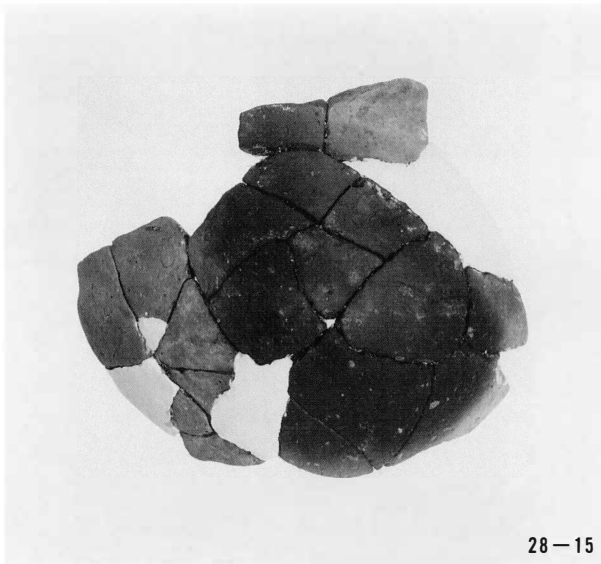


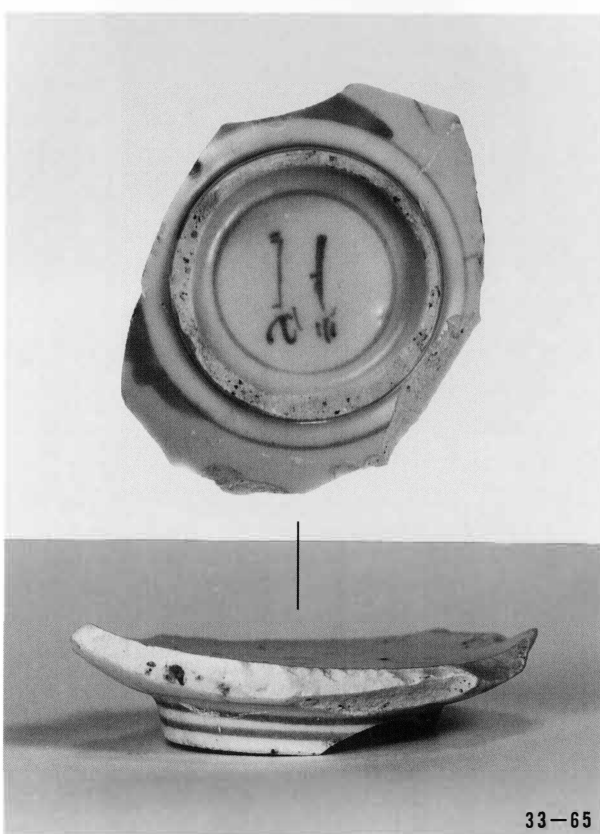
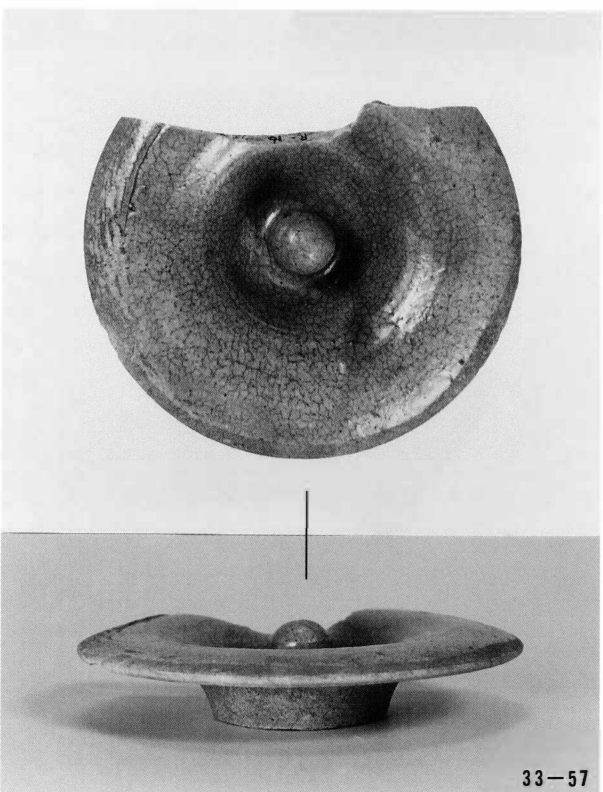
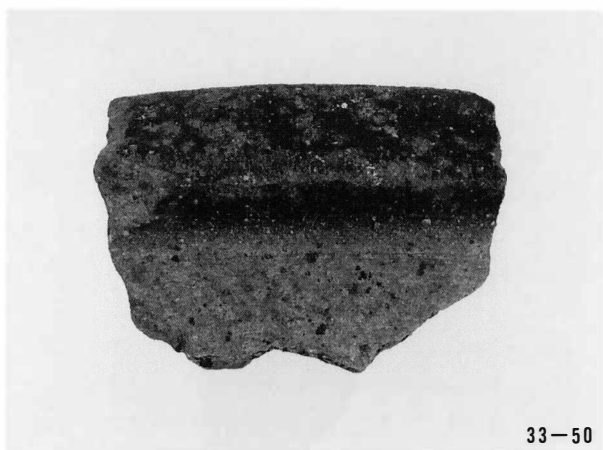
1SD001・1SD002 土層断面 (西から)



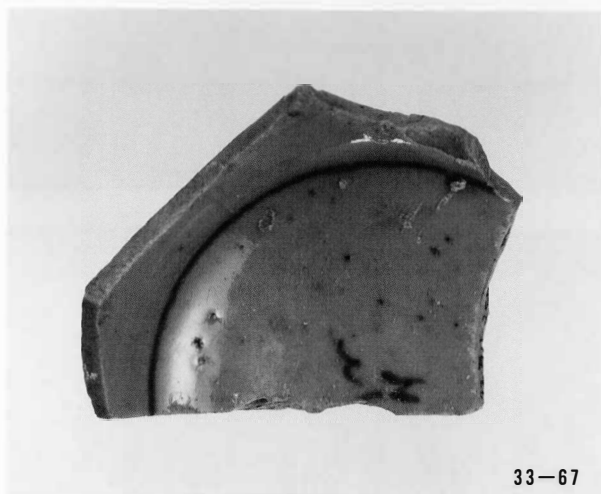
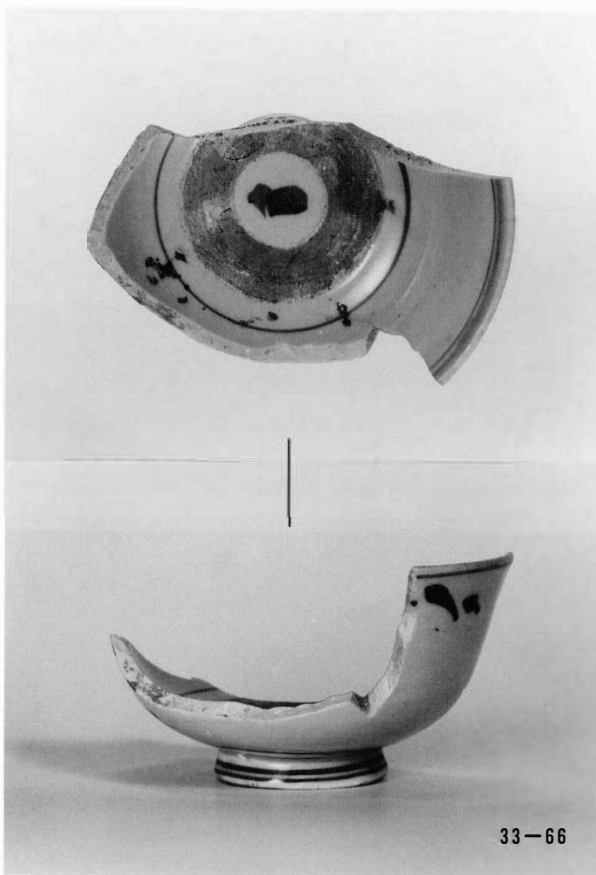
1SD007 土層断面 (西から)

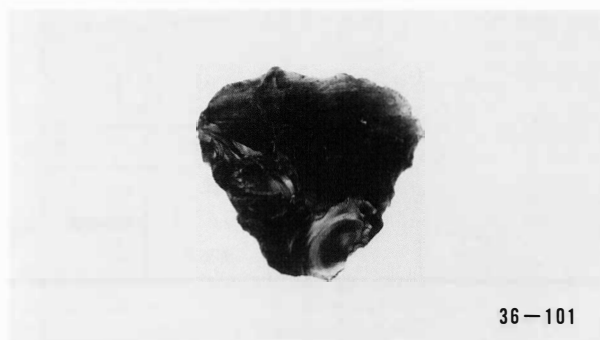
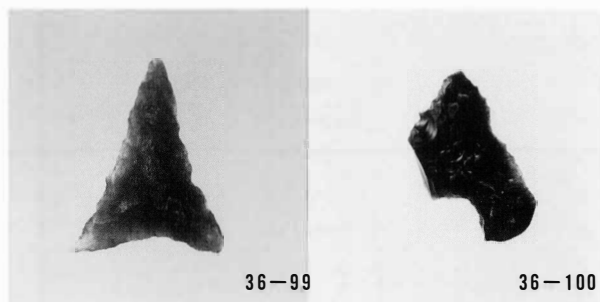
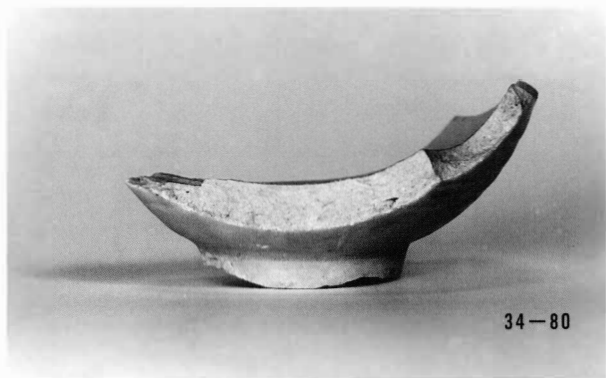
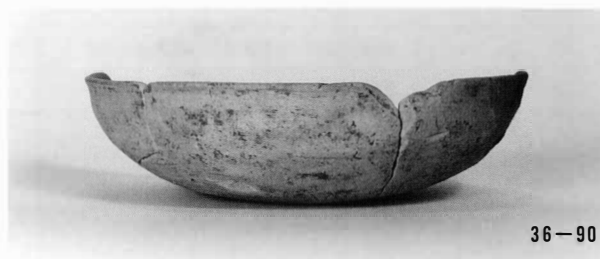
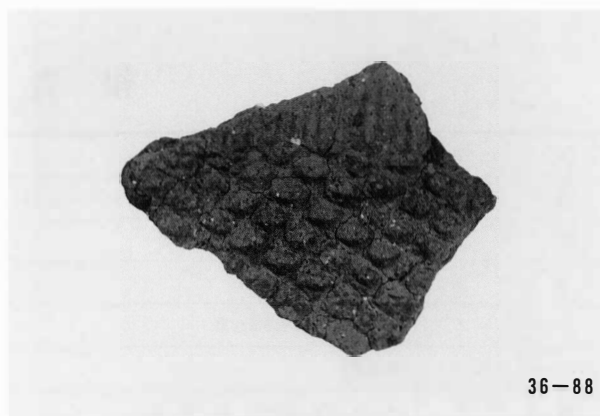
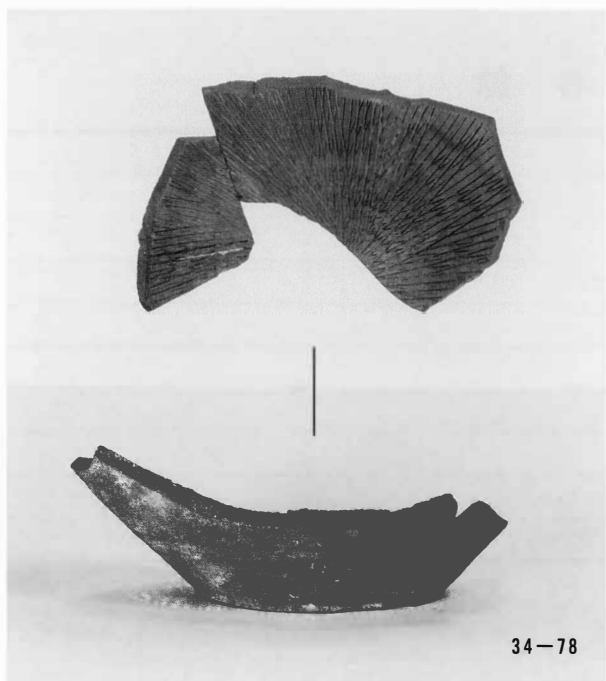
Pl.16





Pl.18





筑後東部地区遺跡群 V

筑後市文化財調査報告書

第35集

平成13年 3月31日

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社
佐賀県佐賀市天神一丁目1番32号